

Parado

パーソナル・パラレル・パ
ラドックス



ろき&ぼうあー



プロローグ

動き出した歯車は止まらない

少年は歳にそぐわぬ険しい表情を浮かべ、魔方陣の上に立つ

「世を助けて...？」

4つの世界と四人子供の冒険が、今

始まる

personal parallel paradox

written by Roki

第一話 研究者 ちょーたろう

ちょーたろうは、憂鬱であった。

ちょーたろうのうちには、何か欠けているように思われた。

ちょーたろうは、ボストンにある、名門大学ストロベリー・マウンテン・ユニバーシティにて、若干18歳の若さで博士になろうとしている研究者であった。

秋の昼下がりの、小春日和のキャンパスの並木道を歩きながら、彼は、次の研究や論文のことについて思いを巡らせていた。

クールだが、幼顔の残る若手研究者を、同じクラスの女子たちがきゃあきゃあ言いながら噂しているのがわかる。

しかし、そんな声も、彼にとっては、やかましい小鳥のさえずりに等しかった。

(学問や、スポーツなど一つの道に精進することもなく、漫然と人生をぬるま湯のように消費するモラトリアム人間どもめ…。

奴ら大衆どもは、誘蛾灯におびき寄せられるように目新しいものに集まり、ひとしきり騒いだ後、また別のものに引きずられて行く…そう…例えるなら、樹液に集まるカブトムシの如くだッ！！

おれは、奴らとは違う。人間そのものが違うのだ。

おれは、人間、奴らはカブトムシ。英語で言えば、ビートルズ。
そう、おれは、ビートルズよりも賢いのだ。)

彼は、ビルの25階にある大学の研究室に上がり、
研究に取り掛かる前に、窓から、地上を満ちゆく人々を見下ろした。

(ふっ、まるで蟻のように、忙しなく出たり入ったりだな。
自分たちが何をしているのかもわかっていないで働かされているかのように。

このコーヒー一つ入れるのにも、私ともなれば、十人分の手間暇をかけている。

つまり、ありが、十匹。ありがとう、だ。)

ちょーたろうは、論文の執筆に取り組み始めた。

それにしても、彼には何かやり忘れたことがあるような気がしてならないのだ。

学生の助手が入ってきて、研究室でなにかボソボソと話し始める。

その瞬間、ちょーたろうは、怒鳴りつけた。

「全く、静かにして欲しい時に、唐突にけたたましく耳に響よってからに！

お前たちは、セミッ！そう、セミだッ！

ミンミンミンミンと鳴いても、

睡眠打破の働きなど全くないッ！」

ちょーたろうの聴覚は、一億Hzとも、言われる、太陽系の運行の音までも聞き分けることができる。

その生まれ持った特異とも言える能力によって、彼は、天才研究者として、若いうちから実績を残しているのだ。

しかし、ご覧の通り、とても気難しい性格であった。

学生たちは、会釈した後、しずしずと部屋から出て行った。

ちょーたろうは、扉も窓も締め切り、論文の執筆に集中し始めた。

部屋が静まりかえり、全くの無音状態になった時、

ちょーたろうの聴覚に、今まで聞こえたことのない不協和な旋律が飛び込んできた。

その不協和の旋律は、ますますはっきりとちょーたろうの耳を揺さぶった。

「おい、お前たち、この不協和な旋律が聴こえないのかッ？」

ドアを開けて、廊下にいる助手や学生に叫んでも、「いや、そんなものは」。

彼は部屋で一人つぶやいた。

「そ、そうだ

この不協和はまさしく、宇宙の軸にブレが生じて、この世界のひずみがあらわになっているときの音だ、そうだ！」

「...ひょっとしたら、

違う世界の扉が開け、世界がバラバラバラになってしまう恐れがあるぞ？

しかし、一体なぜこのようなことが？」

と同時に、ちょーたろうはこの不協和音に対して、ある種の期待を無意識のうちに感じていた。

なぜかといえば、

ちょーたろうが足りないと感じていたもの、

欠けていると感じていたものの答えがそこで示される可能性があるのではないかと、直感で感じたからだ。

その波動と、ちょーたろうの左腕にあるブレスレットが、
キイイイイイインと共鳴しているのがわかる。

このブレスレットは、いつどこで手にしたか忘れたが、
なぜか、彼がいつも肌身離さず付けているものだった。

なぜか、そのブレスレットを見るたび、

漠然と、銀色の髪をした、青と赤の目をした、少年か少女かのイメージが浮かび上がるのである。

あったことも見たこともないのだが、とにかく、そのイメージを思い浮かべるたび、イラっとするのはなぜだろう。

そのブレスレットが、場所を移動したがつている意思を持ったように感じた。

ブレスレットをはめた腕を、彼はそのまま、
ケータイ電話の電波を受けるように、上にかざして、振動数の合うところを探った。

カチッと、
ブレスレットと、彼の耳だけに聞こえる音の振動数が会ったとき、
彼の目の前に、一瞬光が見えて、
白い虎が飛び込んでくるのが見えた。

気がつくと、
彼の耳に聞こえた音も、
ブレスレットの振動も止まっている。

「何だったんだ、今のは...。」

と、彼は肩をおろした。

すると、今度は別の振動数で、ブレスレットから、声のようなものが聞こえる。

「どこからだ？どこの世界からなんだ？」

そう思って、ちょーたろうは、まさかとは思いつつも、声をかけてみた。

「もしもし？もしもし？」

もしもしと言っても亀ではない！！」

...

「なんてな...」

と、笑った瞬間だった。

(続く)

written by Bauer

personal parallel paradox

第二話 月と玩具

姿勢を低くし疾駆する

敵は今も無様に逃げ惑う

その事実を高揚感を味わう

思わずつり上がる口元に舌を這わせ、自信を落ち着かせる

「俺の目からは逃れられねえぜ？」

弾んだ声で目の前に迫った敵の背中に袖に隠した小太刀を突き刺した

上がる断末魔と共に敵は空気にとけるように消えた

任務完了☆

俺は社

代々伝わる陰陽師の家系に女として生まれ、後継者になるべく男として育てられ、下された命令に従い任務を遂行する只の17歳の餓鬼だ

常に生死を分ける生活をしているわけだが、俺にとってはどうでもいい！

回りの空気を読んでヘラヘラ笑い、任務を問題なく遂行すればいいだけの簡単な人生

適度なスリルを味わい、生きている

いわばゲーム感覚

月の無い夜でも遠くまで見渡し、俯瞰して捉えることの出来るこの‘目’さえあれば任務はこなせるし

俺はそこまで興味はないが

どうやら俺の容姿はかなり整っているらしく、愛想を振り撒けば世渡りなど簡単すぎてつまらない

満足感の得られない毎日

なにか足りないような

パズルのピースが欠けてしまっているような
なんとも言えない不快感を抱いて
今日も今日とて退屈な日々を送る

そんな下らないことは考えても仕方がないかー

神社の片隅で揺れる水面を覗き込み
自身のとても目立つ銀髪と赤と青の瞳を見つめる

全くもってつまらない

「はあー...」

小さくため息を吐き出し、帰ろうと水面から視線を逸らせば、視界の隅に映るのは大きく裂けた
空間

突然の事態に呆けてしまう

なんだあれ

ただ素直にそう思った

少しずつ広がる空間の裂け目はスピードを増し

あっという間に神社ごと飲み込もうとする

なんかヤバくね？

そうは思いつつも

口角は上がり、俺の瞳は爛々と好戦的な光を放つ

なにか、なにかが始まる

日常の中に突如現れた非日常

それが嬉しくて不思議と空間の裂け目に恐怖は感じなかった

求めてたものがここにある

根拠のない確信がしっかりとした核を持ち

先程とは比べのになら無い高揚感が俺を包んだ

元々悪い目付きの俺は、その三白眼の猫目を細め、ペロリと唇を舐めた

きらきらと水面に映り込む三日月は俺の付けているカフスパラスを照す

カフスパラスは裂け目の広がる速度と共鳴しているかの如く脈打っている

何時から付けてるなんてもう忘れたけど肌身離さず付け続けている

不思議な模様のカフスとチェーンで繋がった青い石が嵌め込まれたピラス

これを見てると時より視界を横切る眼鏡を掛けた神経質そうな青年の姿

会ったことの無い青年の姿を見るたびに、人付き合いとか苦手そう、絶対変人と少し興味を引かれていた

変人は退屈しないから大歓迎だ

っと今はこんなことどうでもいい

裂け目は神社をほぼ飲み込み、カフスパラスから伝わる鼓動が早鐘を打つ

もうすぐ

もうすぐ！

完全に裂け目は神社を飲み込み、カフスパラスの鼓動も止まった

そして止まったと同時に聞こえてきた聞き覚えの無い声

《もしもし？もしもし？
もしもしと言っても亀ではない！！

...

なんてな...》

なんだこいつなんだこいつなんだこいつ！！

「ブハッwwwwwwwwww
ちょ、'亀ではない'(・ω・´)ギリッっていきなりぶっ混んできちゃったwwwwwwwwwwwwwwww
ファー———wwwwwwwwwwww
俺は社でっす☆
よろしく～ww」

面白いオモチャみつけた！

〔続く〕

written by Roki

第三話 ルーシー・イン・ザ・スカイ・ウィズ・ア・ペンダント

さて、また、舞台は別の世界に。

「うおーーーー、やっぱりほん、すばらしい
ビューティフルねー。ファンタスティック！！

ここにきてよかったんだぴょ！！」

「こらー、そこの金髪の少女！
五重塔に登るのは危険です。直ちに降りてください！」

警備員に叫ばれ、ルーシーは、塔のてっぺんから、逃げるように素早く飛んで逃げた。

「うぬぬー。幕府のサムライに見つかってしまったぴょー。ここで、いちじ撤退なのだぴょん」



忍者かぶれの格好をしているルーシーは、イギリスから関西地方に越してきたのである。

理由は、直感で忍者と日本文化に憧れたから。

ルーシーには、子供の時からそういうことがある。

「何かをやりたい！」と感じたら、その瞬間、なにも考えたり立ち止まったりすることなく、動き始めているのだ。

おばあちゃんが日本人のクォーター(4分の一)ということもさておき、日本語を話せない外国人も多いが、ルーシーに至っては、三ヶ月で、日本語はおろか、日本史、及び、日本のアニメ、そして大阪弁と、神戸弁と、京都弁と奈良弁の微妙なニュアンスまで、あらゆる情報を駆使して八歳の時にものにしてしまったのである。

ただし、思い込みやずれたところが激しくあり、テレビで忍者を見て、日本人のおばあちゃんに、「ばあばの先祖は忍者に違いないよね！」と断定し、家族全員から、失笑を買ったが、「だったら、るうたんも、きっとニンジャなんだー！きっとそうだ！」と、信じ込んでしまった。

(のちに実は、この思い込みが真実であったと判明するのはこの後のことである。)



「よしー！るうたんは、日本に行くのだぴょ！」

そして、ルーシーはその日から、一人で忍者修行を開始する。

「忍者になるには一。

まず、
薬草と毒草の違いをみわけねばならぬぴょ。

...これは、薬草、

...これは、毒草、

これも毒草、毒草、毒草。」

ルーシーは皿に、色とりどりの草や野菜をより分けた。

「これ！るうたん！好き嫌いとお残しはいけませんよ！

人参もセロリも、ピーマンもお皿にわけないでしっかりたべなさい！」

「まっ、ママ...これはるうたんのれっきとしたニンジャ修行なのですぴょ！」

「何をわけのわからぬことを言っておるかー！

はい、るう！お口をあけて！あ————ん！」

「むがああああ！

敵に毒を飲まされる、何の刑罰じゃああああ！無念ぴょー。」

このようにして母親という師匠が加わった厳しい修行は続き、ルーシーは、毒草を食べても、何一つ身体に害のない脅威の肉体を作り上げていったのだった。



また、月の見えるある晩、ルーシーは城に侵入し、敵から逃げていた。

「逃げきれないと、るうのいのちが危ないぴょー。あわわー。」

城から、刀や銃をもった兵士たちがルーシーを追いかけてくるのがわかる。

門の前にも兵士が並んでいる。

「絶体絶命だぴょ。

そして、それよりまずいのが、るうたんは、今、この切迫した状況で、トイレに行きたいんだぴょ...。」

うしろから、ある兵士がルーシーを見つけて、追いかけてきた。

なんとか、見つからないところまで来たが、前には、堀が。

「トイレにも行きたい！逃げられない...。」と思ったが、ルーシーの頭の中に天才的なアイデアがひらめいた。

「そうだ！思い出した！

るうはニンジャなんだから、水遁の術がつかえるのだびよ。なぜそれを忘れておったのだびよ。」

ルーシーは、お堀にバシャーと飛び込んで、その中に息を潜めた。なぜか水の中は暖かく気持ちよかった。

その瞬間、ルーシーは違和感に気がついて、ハッと目を覚ました。

「ゆ、ゆめだったのかびよ...！」

ルーシーの布団もパジャマも、「水遁の術」の失敗でずぶ濡れである。



隣で寝ていた、ママが布団を剥ぎ取り、

「るうちゃあん、なんですかこれはあ？」と。

「こっ！これは、水遁の術の練習なのだびよ！

るうは、いざという時に、こうして、忍術の一環として、布団の上に地図を描いて、敵をあざむくのだびよ！

こういう術を無意識レベルまで落とし込んで実践するのが本物のニンジャなのだびよ！

これで、寝ている時も安心なんだびよ！」

「しかし、るうちゃあん、
そうやって、おねしょなんてヘマをするニンジャはおそらくひとりもいないよー。
そんなことで、ジャパンにいけるのかなあ？
あなた、いくつになったんですかあ？」とママはいたずらっぽく聞いてくる。

「寝床を自ら穢す、この狼藉ものに、尻叩きの刑じゃあ————っ！

加えて、被告人の床に入る前のジュースは一切禁止とするっ！」

「ひえええええっ！」

このような、厳しい修行の成果もあってか、ルーシーは水遁の術で失敗する回数は減ってきたのであった。



このような忍者修行の日々を繰り返し、ルーシーの、日本に行きたい熱は高まり、
13歳になったある日、
ついに、日本に来る日がやってくる。

日本人のおばあちゃんの親戚筋の人が、ルーシーを受け入れてくれるというのである。
修行を指導してくれた(笑)ママとも、家族とも別れて、一人で留学する決意をしたのであった。

師匠のママが、出発前に、ルーシーを抱きしめて言った。

「るうちゃん、今までよく修行をがんばってきたね。
好き嫌いなく、食べることもできるようになったし、
夜中に一人でトイレにも行けるようになったね。
毎晩、歯磨きもできるし、
これで、もう、世界中どこに行っても、あなたは立派に生きていくことができるわ！」

「それに、バック転も宙返りできるようになったし、鉄棒があれば大車輪もマスターしたし、
株式投資も覚えたし、微分積分も三角比も実生活で使いこなせるし、フルマラソンも3時間半切っ
たんだぴょ！」

と、ルーシーはその場で片手逆立ちからの宙返り披露してみせた。

傍で会話を見ていた、パパがあまりのギャップに嘖き出した。

「それに、るうたんは、修行の結果か生まれつきか、数キロ先の離れたひとの匂いを嗅ぎ分けることもできるんだびょ！

これでもう怖いものなしだびょ！」

「さらば！我が娘、ルーシー！旅の無事をいのっているぞー！」

そうはいっていた矢先に、

出航の日付を微妙に間違えて、空港で一泊することになったり、

間違えて、中東行きの飛行機に乗ってしまいそうになったところを止められたりとしたのだが、無事になんとか、ロンドン発関西空港行きの飛行機に乗り込むことができた。

13歳の、はるか遠い憧れの国への一人旅が始まった。

一体どんな出会いがあるんだろう。

そういえば、ママが出発の前に、「肌身離さず持っていなさい」と首にかけてくれた不思議な色のペンダント。

その時の意味はわからなかったが、のちにそれが大きな大きな意味を持つことになるなんて。



難なく、日本に到着して、ルーシーは、ホストファミリーのところに行く前に時間があると思い、
奈良を訪れた。

何もかもが新鮮だった。

不思議な国だと思った。

五重塔に登ることはもちろんのこと、道を歩くサラリーマンにトランプで勝負を挑むなどということは、いけないことだなんてわかった。

ほかにも、電線の上を綱渡りしてはいけないし、交通中の車の上をピョンピョン渡っていくのもいけない。

建物に登る時は、フックをかけてロープでよじ登るのではなく、階段やエレベータやエスカレーターを使うことが義務付けられている。

たとえ田舎町でも、町中が壮大なトラップなのである。

こんなことでは、ニンジャは生きていけない。

普段は前向きなルーシーも、目の前の困難にすっかり元気をなくし、大きなお寺のそばの公園を一人で歩いていた。

ルーシーはそこででとある鹿に出会い、世間話をはじめた。

「ねえ、あなた、お名前なんていうの？」

「特に、なまえ、とかいうものはないけど。」

「それじゃね、るうが、名前つけてあげる！あなたは一、ツノがかっこいいから、ツノにちなんで、《しんのすけ》」

(ツノ、関係あんの?)と、鹿は思ったが、その名前が気に入ったので、しんのすけと名乗ることにした。

二人は、ベンチでコーヒーをすすりながら、話した。

「ねえねえ、しんのすけ。るうたんは、ニンジャになりたいくて、日本に来ただけけれども、しんのすけはどこにニンジャいるか知ってる？」

「さあね、ニンジャなんて、この建物が工事されてる辺りの500年くらい前には見かけたけれど、ここ150年は、いないんじゃないかね。」

「ええええ？それじゃあ、もう、日本にニンジャはいないってこと？ふええ」

「そう、落ち込むな、るうさんや。
文明社会になったところには見かけなくなったかもしれないが、《裏日本》には、まだニンジャどころか、もののけとか、仙人やら、いるかもしれんぜ！」

「ええ！ホント？
どうしたら逢えるびょ？」
ルーシーは目を輝かせて、しんのすけに聞いた。

「さあね、おいらも、実際に会うことはあまりないけどね。
良ければ、近くまで連れて行くことはできる。
背中にのんな！」



ルーシーを乗せたしんのすけは、古い町並みやお寺を風のように走り去り、いつの間にか、鬱蒼とした山や森の中に入っていった。

しんのすけは、山の中の小さな鳥居の前で立ち止まっていった。

「この鳥居が、現世(うつしよ)と、ニンジャの世界の境界あたりだと考えてくんな。」

「ありがとう！しんのすけ！また会おうね！」

鳥居の前で、
あのペンダントがほのかに光を放ち、小刻みに震えている。

なにか、そのペンダントは、メッセージを発しているように感じた。

「やほー！きたよーん！もしもしー！」

(続く)

written by Bauer

第四話 非日常へようこそ

赤く染まる教室

沈む夕日を眺め、僕は本を閉じた

そろそろ家に帰ろう

鞆を肩に掛け、本をその中に放り込む

本のタイトルは

『不思議の国のアリス』

何度も読み返しよれた本は日焼けで黄ばんでいる

鞆の中には同じような状態の本が数冊入っていて

『灰かぶり（シンデレラ）』『ヘンゼルとグレーテル』『白雪姫』
と、どれも有名なタイトルばかりだ

それぞれ本家なので怖い終わり方となっていて

僕の周りはこの終わり方を敬遠しているがこちらが本来のストーリーなのだから仕方ないと思う

そういうことを言うと周りは目に見えて僕を遠巻きにし、僕は孤立していると言ってもいいだろう

まあ、一人は嫌いじゃないから別にいいけど

前にも増して物足りなさが増大している毎日

夕日で伸びた影を見つめ、帰路につく

イヤホンから流れる童話を元にした造作曲を聴きながら歩くこの時間が僕は好きだ

物足りない、満たされない心を癒してくれる

自然と緩む頬に肩の力も抜ける

騒がしい大通りから外れ、静かな公園に差し掛かったその時...

ヒヤリと背筋に冷たいものが滑り落ちる

首筋に視線を感じ、振り返るが誰もいない

しかし、突き刺さる視線は止まない
むしろどんどん強くなっている

不安が募り、ネクタイに付けた紫色のブローチを握り込む

何故だろう？

ブローチがじんわりと暖かい

何時から持っているのか分からず
それでも肌身離さず付け続けているブローチ

時おり見える金髪と茶髪と銀髪の影をふと思い出す

なんで今なんだよ

得たいの知れない視線への不安感と好奇心

昔から待っていたようなこの感じ

期待と好奇心を感じつつも、物怖じして1歩後ろに下がった

だけど後ろに地面はなくて

「…………っえ？」

自身の夕日に照らされた蜂蜜色の髪を視界の端で捉えながら

僕、リクは

アリスのように、底の見えない穴の中へ落ちていった

第五話 三人、出会う。

ブハッ WWWWWWWWWW

ちょ、「亀ではない」(・ω・´)キリッっていきなりぶっ混んできちゃった WWWWWWWWWWWW

フアーーーー WWWWWWWWWW

俺は社でっす☆
よろしく～ww」

ちょーたろーは驚いた。

時空の裂け目か何かからは知らぬが、
そこにふと現れた「窓」のような空間に
音声と、ボヤけた映像が流れてきた。

(……誰だよ…この、チャラ男は。
…俺の最も嫌いなタイプだ…。

しかも、なんだよ…この奇妙ななルックス。何時代のどこの国だ…)

「おい、貴様！」

「わっ！つーじた、つーじたぜ☆
ねー、君は、

………

何なの………？」

(ぴくっ)←ちょーたろうにアオスジが立った。

「………

いや、それ、俺が聞きたいんだけど？

お前こそ何よ？」

「ああ、俺？さっきも言ったちゃん☆
俺は社(やしろ)でーーーーす」

「それは、聞いたよ。
ああ、ちなみに、俺は、ちょーたろう。
ストロベリー・マウンテン大学の研究者だ。」

「ぶはっ！！研究者ってwww なんか、むっずかしそう。
俺さー、殺人術ばかりれんしゅーしてたから、けーさんも、かんじもあんまかけないし、サインコサインポインポインって感じでさー
アイアムアペーンー！」

(プツッ)

「馬鹿は嫌いだ。俺の目の前から消えろ！！
√7秒以内に！！」

「おいおい！
いきなりこの不思議な空間が現れて、お互い始めましてでそれはないっしょ！

もっと、お互いのこととか、この変な現象のツツ……………」

ギラーン
刹那、ちょーたろうの鋭い目が光る。

「√7=富士山麓オウム鳴く、2.360679…秒ツツ！
タイムリミットだ。

この不思議な通信現象に私の興味が大いににある以上に、
お前の存在に対する興味のなさが、優っているツツ！

すなわちツツ！
わかりやすく言うならだ、
私の興味のベクトルを、xy軸それぞれ、正の方向に、10とするならばだツツ
私の、貴様に対する、興味のなさのベクトルはツツ、負の方向に、20ツツ！
この二つのベクトルを、掛け合わせた時、圧倒的に、興味のなさのベクトルが、正のベ
クトルを打ち消すのだツツ！」

「いっ、言ってることがよくわからねー。さすが、インテリ！」

「さあ、消えろっ！！」

「おいおいまてよってば。消え方も知らんし、なっちゃったものは仕方が無いだろう」

「どうにかして、消えろ！
私の、お前に対する興味のベクトルが、今だに、負の方向に伸び続けているうちにツツ
」

「コノヤロウ！てめえ！
ちょっと話聞けつつってんだろがよ！！
殺されて一のか！？」

社の声のトーンが、今までのチャラ男具合と全く変わったようになってしまい、
ちょーたろうは、内心驚きながら、どうしていいものか戸惑った。

「…貴様、
俺の負に向いていた興味のベクトルに、さらにマイナスをかけて、とてつもなく、正に
転換したな」

「だあーからさあーっ！
ちょーたろうお前、感じねーのか？

俺はよー、
感じるんだ。

この、二つの空間が繋がった出来事の中に、何か、俺たちのなくした大切な忘れ物があるんじゃないかかってよ。」

「…ああ、そう言われてみれば」

☒☒その時…！

その空間に、新しい声が聞こえてきた。

その声を、ちょーたろうも、社も聞くことができた。

「うわああああああああん」

ちょーたろうの背中に、声の主が落ちてきた。

「ひっ…………ひいいいん。

ドキドキ。

ここどこ？

あっ！人に当たっちゃった！ごめんなさい。」

「うむ…」

ポーカーフェイスのちょーたろうは、痛みも驚きも顔に出さないまま、言った。

「また、別の空間が繋がったようだな。

例えるなら、

私の世界が、XY軸の第一座標に存在しているとして、

社は、対角線上にある第三座標に存在している。

今、我々は原点ゼロ地点において、違う座標との交信を行っているわけだ。

そこに、第二座標か第四座標の世界の存在が第一座標にX軸若しくはY軸を軸として平行移動、若しくは対象移動してきたと考えるべきではないだろうか。」

「申し訳ない…ちょーちゃんの言うてること全然わからないぜ！」
と社。

「いや、第一座標は、きっと僕ですよ。

あなた方がきっと、第二から第四座標に住んでいるんであって…」

その内向的に見えるあどけない顔をした少年が言った。

「ぶげー———！こいつも、なんかインテリぶりやがって☆」

「あなたの話、そして、この空間に現れている、愛と赤の眼の人の話で、何と無くそんなことなのかなってことはつかめましたよ。

あ、申し遅れました。
僕は、リクっています。

趣味は、えと、読書で、
だから、こんな世界があっても、別に、不思議じゃないなって思ってます。

でも、なんでこんなところにきちゃったのかな？」



「ううむ、これはどこか、
空間を超えた出会いが、三次関数的に、引き起こされて、
第一座標において、それぞれ三つの座標における関数の曲線が、交わっているという現象なのだろうか。」

「幻想文学的に申し上げるならば、交錯する世界が統一する普遍的な宇宙によって、ワ
ンネスにいたるダイナミクスエネルギーの過程で、パラレルしたとも言えますね。」

「だーかーらー！難しい話はやめろっつってんだろおおおお(泣)」

あーもう！
そっち行った方がいいか？」

社が、
「窓」から、身を乗り出しそうな勢いだ。

「え、ちょ…危ないんじゃないか……。」
とふたり。

「いいじゃんかよ☆」

(続く)

第六話 ちょーたろー、妖に襲われる

「ちくしょー...ったく。
なんなんだ、社とかいうのと、リクというのが、ドタバタドタバタ次々とやってきたと思ったら、
また、すぐに消えてしまいやがった。

(もう、くんな！)

一連のやりとりのあと、訝しげに、閉じた「窓」のあった場所を見つめながら、
肩をおろすちょーたろう。

「そういや、ジンジャがなんだとか、オフダがなんだとか、シキガミがなんだとか言ってたな。
ニホンの土着の霊的な文化にそういうものがあるとはきいているが。
そういう非科学的なこともたいがいにしてもらいたい。」

その時、
ちょーたろうは、背後にえもいわれぬ気配を感じた。

「誰か...いるのか？」

バツと振り返った。

...誰もいない。

「気のせいかな？」

最近、異世界と通じているせいかな、変なものも来ていてもおかしくないと思ったが、流石に、そ

こまでは...。」

高鳴る鼓動を抑えつつも、
もう一度、ちょーたろうは、振り返った。

「はっ！！！！！」

...

やはり、誰もいないではないか。

「ふう...俺らしくもない。何をそんなに怯えていたんだ」

と、ため息をついて、水道で手を洗おうとして、蛇口をひねった時、

蛇口から赤い水が出てきた。

「血？なんだ！水道管の故障.....」

と思った瞬間、赤い水の奥から、漆黒のドロドロした得体の知れないものが出てきて、一気に、溢れ出し、大きく広がった。

それは、姿は黒い毛のようなものに覆われてギョロギョロとした目を持ち、
口のように見えるところからは、血と牙がむき出しになっている。

「グウゲグウゲ...グルるるる。
ニンゲンのめだまがぐいでえええええよおおお！！
耳がぐいでえええええええええ！」

蛇に睨まれたカエルのように、ちょーたろうは、固まってしまった。

が、
それは一瞬だった。

「時代遅れのエクトプラズムめ！現代科学の力を舐めるなよッッ！」

ちょーたろうは、ポケットから、手に持てるサイズのペンを取り出し、その先のスイッチを押した。

先から、強い光が発された。

「LEDライトを個人的に進化させた、LEEDだっ！喰らえ！」

その、妖は、あからさまに嫌っているのがわかる。

「解るか？バケモノ？
お前の為にレクチャーしてやろう。
この世の一切のものは波によってできている。

例えば！
音で言えば分かりやすい。
音叉などを鳴らす時、音叉が振動することによって波が発生する。
その波が、様々な物質に触れることで、その物質も一時的に同じ波の波形を持つのだ。それが、聴覚に伝わり、脳は、音として認識するッッ！

音叉を止めれば、また波も音も止まる。

ここテストに出るから、しっかりノートにとってろ！」

と、ちょーたろうは、余裕たっぷりに、壁にかかっていたホワイトボードに図を描き始めた。

化け物は、大人しく聞いているのか、あるいは光を嫌がっているのかわからないが、小刻みに震えながら動かない。

「さらにッッ！
私は、この技術を、あらゆる物質レベルまで発展させッッ！」

ごくごくマイクロサイズのビッグバンを発生させることに成功したッ！

物質と物質の間、原子と原子の間には、小さな虚空があるッ！

その虚空の中においては、常に物質が生まれ、また、その虚空に向かって物質は消えて行くことがわかっているッ。

その物質と、虚空の関係も、また波なのだ。

あらゆる物質があるということは波が立っている状態。

そして、虚空とは、波が生じていない状態。

このLEEDの光は、虚空の波立たない状態から、人為的に、波を発生させて、物質の在り方を変えてしまうのだッ！

逆に、物質の波を、再び虚空に戻してしまうこともできる。

そう、

こうやって...

もともと物質でない貴様を、さらなる虚空に還らせることもできるッ！

さあっ！

光に還れ！

科学の力によって！」

この勝負は、決めゼリフをカッコ良く決めたちょーたろうの圧勝のように見えた。

しかし...

「こ...このLEEDはな...ウルトラマンと同じで、三分間しか使えないのだ。

それに、力も弱い...。きっと、そこらへんの家電製品とか、ロウソクの方が、効果があると思う

。

なぜ、わたしがこういうものをポケットに常備しておるかということ、冷え性の私は、この光で暖まっているのだ。

他にも、電池がわりにもできたり、ペーパーカッターにもできたり、
メガネの消毒にも使えたり。
便利なのだよこのLEEDは。

それ以外に、私は、生身でこういう非科学的な存在と戦う術を持っていないのだよ。

いや、でも、これが、案外、こういう化け物を食い止めることができ、
私自身驚きを隠せないでいる。」

なんていうくどい説明をしているうちに、
LEEDの光が淡くなり、ふっと消えてしまった。

「グオオオオオノオオオオオヤロオオオウウウ。
憎い憎い憎い。
喰いたい喰いたい喰いたいよおおおおお」

化け物が襲いかかかって来た！

その時！

赤と青の目をした、あいつが、飛び込んできた。
さっき居たばかりのあいつ。
そう、あれは社のはず。

「おいおい！大丈夫か。」

やつは、手に印を組み、呪文を唱えた。

「オーム！宇宙に遍満せり諸々の無限の諸力よ、今こそ光を解き放て！
目の前にいる闇に対し、光の矢を射抜け！

唵 阿謨伽 尾盧左曩 摩訶母捺囉 麼拏 鉢納麼 入縛攞 鉢囉鞞哆耶 吽

破邪ッ！」

弾けるような光が、光ったかと思うと、その妖は破裂した。
周りに、黒いものや赤いものを撒き散らして。

「社！社なのかっ？」

「そうですけど、俺、ヤシロっていいます。
はじめましてかな？ちょーたろうさん。
大学では有名だから、遠くから見て憧れてたんだよなー。

さっき、中庭歩いてたら、気配感じたもんで。」

ヤシロの姿はさっきと違う。
趣味がいいのか悪いのか、判断しかねるファッション。

「何見てんの？
俺、こう見えても女子だよ。」

「いや、そういうことじゃない。えーと、はじめてか？俺とあうのは」

「中庭で、半年前から、ベンチとか廊下で、遠くから見てたなー。
実は、俺、同じ学部の後輩なんだけどね☆」

「...お、おう。覚えておくよ。助かった。」
(さっきの社と、このヤシロは、違うのか...)

「はっ！
おまえ...おんなか。おんなだったよなー。
ちょーたろうは、むっつり顔のまま言った。

「みりゃわかんでしょーが。」

「...」

「なんだよー」

「俺の一番嫌いなタイプの女だ。」

「てめー！それが、助けてくれたボーイッシュでキュートな美人に対する言葉か！？」

「もっと、金髪でかわいい美人だったら、一目惚れだったろうな...ふっ」

「ケッ！てめーみてーな毒舌なんざ、一生女にもてねーよ！」

「ああ、それでいいね！」

「...ちょっと待て。

今の俺がした攻撃は、その場しのぎでしかない。

やつは、思った以上に厄介な相手だ。」

「なんだと...」

散らばった肉片が集まって、脈打っている。

「今の間に、力を集めないと...

ああ、でもどこから。」

「落ち着け。俺がついてるだろーがよ。

この、チャラお、正確にはチャラおんな！」

その時、ちょーたろうの、腕にあるブレスレットが、振動を起こしはじめた。

「「そうだ！これだ！」」

二人とも同時に叫んでいた。

「だれかこ—————いい！」

第七話 るうたん、かもーん！

「やぼー！きたよーん！」

ちょーたろうのまえに神社の鳥居が見えた。
その鳥居の前には、金髪の女の子が無邪気に笑ってる。

「いいから、早く来い！！」

「それきたー！いくびよーん。」

女の子は、鳥居の中に飛び込んだ。

「窓」から、女の子が飛び込んできて、そのまま、ヤシ口のところにダイブ！

「やややや、
ここわここわここわ？
ひょっとしてニンジャの里にきたぴよか？ そうなのね？
わあいわあい。

そしてッッ！

この目の前にいる、みよーにへんちくりんなマテリアルとやらが！

マテリアルとやらが...」

じ—————

と、ふたりをみつめる女の子。

「何ぴよ？」

「いや、お前が何...？」

「え？るうちゃんのこと？

るうちゃんはね、るうちゃんていうんだぴょ？」

「あ、ああ。他には？」

「るうちゃんの本名は、ルーシー・ハットリ・オノ・ウィンストン・ベルナディッタ・エリザベス・フォン・ハプスブルグってゆうぴょ。生まれはグレーとブリテン及び北アイルランド連合王国のリバプールだけど、ロンドンやバーミンガムとかにもすんでたぴょ。

忍者修行をして、日本に来たぴょ。忍者にとって必須のお箸は持てるし、横断歩道も、白いところだけ踏んで歩けるのだぴょ！」

(謎だ-----！！！)

二人ともそう思った。

「ううっ！

こここの、脈打つマテリアル、ひじょーに、邪悪なにおいを発しているのですぴょ。」

「そうなんだ。えと、ルーシー、いや、るうでいいか。

水道管から襲いかかってきたこいつに、食われそうなんだよ。」

ピクっと、ルーシーが反応した。

「この《子》...お人形のにおいがするぴょ。」

「人形だと？なんで分かるんだ？」

「におい...昔、きっとそうだったんだとわかるぴょ」

「そんなことはいいじゃん☆

邪悪なものは即征伐だよな☆」

「

でも、この匂いは...

忘れられて、
ほったらかしにされて、
誰かにボロボロにされてしまって、

今は、カビだらけになっている。

そんな悲しい

においだびよ...」

「.....」

「悪いこと...しちゃってたかな。」

と、得意げだった二人ともどこか罰が悪そうだ。

「そうゆえば...

この近くに、
ジンジャはあるぴよか？」

「ジンジャー？生姜のことか？」

「ちがうぴよ！
にほんには、ジンジャとゆうパワースポットがあるときいたんだぴよ。
そこで、にほんのサムライも、ニンジャも、農民も、みんな魂とか霊を浄めるぴよ。」

「残念だが、ここは、ボストン。そんなものは、ない。」

「はえ———？奈良から、ワープしてきたぴよかー？」

うみゅ——ん。どうしよう。」

「そういえば、おい、ヤシロ、
俺の知っていた社は、神社にゆかりがあったはずだ！！
ヤシロ、お前は、社のことを知らないか？」

「なにそのウケるネタは？ちょーたろう、
なにいつてるかわかんねーよ☆

アヒヤヒヤヒヤ.....ヒヤ...

あれ？

あ...」

ヤシロのあたりの空間が、ねじ曲がっているのがわかる。

「いや、知ってるかもしれないけど、
なんかよく思い出せないんだ。」

「いや、俺も、なんだか、別の宇宙の音が聞こえてきたんだが...」

「るうたん、えとね、えとね、
お山のおいと、機械のおいと、夕暮れのおひさまのおいと、
ぐわわわーってなってるぴょ！」

(続く)

第八話 社のやみ 闇-病み

窓を飛び越えた俺はリクちゃんを下ろし、手水へと走る

近くに落ちてた比較的綺麗な桶を拾い
身を清め、桶に水を張る

水を張った桶に水晶と塩を入れ、神社全体に響くように大きく拍手を打つ

「清められし水鏡、彼の者と我を繋ぎたまえ
我が名は社、神の住まう場所なり！」

俺を中心に大きく風が吹く
肩に掛けた羽織が、大きくゆとりのある中華服の袖がはためき
俺の霊力の強さと比例して唸りを上げる

リン—————

小さな鈴の音が響き、桶の中の水に波紋が広がる

ザザッ—————

ザザザッ—————

波紋の中、水に俺ではない人影が映る

「俺だ！社だ、聞こえるかい？」

努めて優しく声を掛ければノイズ混じりに向こうが頷くのが見えた
その事実ホッと息を吐く

口を動かす水鏡の向こう側の人物
声は聞こえないけど口の動きで分かる

<社様、大丈夫ですか？>

「大丈夫だよ
ただ、ちょっと次元を越えてしまってね
暫くそちらに帰ることは出来そうにないんだ
だから俺が帰るまでの間、皆の事頼んでもいいかな？」

<それは構いませんが、我が申しいても聞く耳を持たぬ者が居るのも事実>

「んじゃ、俺からの伝言！
皆仲良く俺の帰りを安全に待っててね
じゃないと俺心配で帰るまでに集中力が散漫になって怪我しちゃうかもしれないから！
だから皆に俺からのお願いね？
って皆に伝えてくれる??」

<かしこまりました
社様、お気を付けて>

「うん、ありがとね」

<我はあなた様の式、当然です
愛しき我が主よどうぞ行ってらっしゃいませ>

「いってきます」

ここで水鏡は途切れた

声を聞けなかったのは残念だけど無事に伝えられた事に安堵する

「ごめんねリクちゃん、暇だったしょ？」

「ううん、凄いものを見せてもらっちゃた」

はにかむリクちゃん

なんだ、笑った方が可愛いじゃん

「まあね☆
これでも陰陽師だし！」

「お話の中だけの存在となり掛けてる陰陽師に会えただけで僕はこの世界に来た価値はあると思
うよ

だけど

君は信用できない」

困ったように告げるリクちゃん
やっぱりかー

うん、なんとなくそんな気はしてたよw

「どうしてそんな笑い方をするの？
せせら笑い、その目に殺気を乗せて
君の目は綺麗な色をしているけど酷く濁ってる
僕にはそう見える
殺意、憎悪、嫉妬、渴望、絶望、孤独、悲哀
そんな負の感情を全部混ぜ込んだ色をしてる
少なくとも僕にはそう見える

ねえ……

君は誰なの？」

酷く核心を突いた質問

だけど俺にはそれに答える勇気なんてものを持ち合わせていなかった

「俺は、社
陰陽師の社
只の無力なガキだよ」

ニッコリ微笑めば顔を歪めるリク

彼は、人と正面から向かい合いすぎている

適度な間合いを、踏み込んではいけない一線を平気で踏み込める強さがある

だからこそ脆い子

謝り癖はきっとその脆さを表してるんだろう

逃げる事を知らない、逃げ道を知らない
だからこそ純粋で、人の一番触れて欲しくない一番脆い部分を掴んでくる

昔の自分を見てみたいで憐憫に思うよ

お互いに視線を逸らさず譲らぬ冷戦

しかし、俺の視界の端に映る人影に冷戦は終わりを告げる

「誰だ！！」

袖に仕込んだ小太刀を握り、リクの盾になるように人影との間に滑り込む

「待て、お前達こそ誰だ！！」

人影の正体

それは

「ちょーたろーさん？」

紺の着物に身を包んだ神経質そうな男

先程まで別空間で一緒にいた人間、ちょーたろーその人だ

けど、彼が何故ここに？

「何故名前を知っている！？

貴様等まさかアイツ等の仲間か！！？」

アイツ等？

「すみません、誰の事を申しているのか分かりかねますが我等はとある事情により、この神社へと立ち寄らせていただいた次第です

申し遅れました、私は社と申します

貴方の事は知人と似ていたので...

まさか名前まで一緒だとは思いませんでした」

武器を仕舞い

苦笑を浮かべ、丁寧な物言いをすれば相手方は警戒心を緩める

「そ、そうか

いや、俺も不躰なことを言ってすまない

俺はチョータロー

この近くに住んでいるものだ

君達は何故こんな夜中に、しかもその格好は……」

「あ、それはっ」

言い淀むリクちゃんを片腕で制し、落ち着いた声音を意識して方便を吐く

「我々は地方を歩いて回っている修行中の法師です

実は泊まる場所がなく、この神社にて一晩明かさせていただこうと立ち寄った次第で…」

「法師！！

そ、そうか……」

この反応、ここには何かあるな……

「ここは不穏な気配がしますね

なにかあったのですか？」

鎌を掛けてみればあからさまに動揺するチョータローくん

「何かあるんですね？」

スッと目を細めれば諦めたように息を吐くチョータローくん

背後のリクちゃんが少し怯えたように俺の服の裾を掴み、俺の影に隠れる

得たいの知れないものへの恐怖心

初々しいな

「じ、実は山からこの村に時々鬼が下りてくるんだ

奴等は作物を奪い、生け贄を求める」

「酷い……」

顔を歪め、悔しげに吐き捨てる彼に同調し

今にも泣き出しそうなリクちゃん

なるほどな

「次の生け贄は俺の妹なんだ
生け贄を渡さなければ村人全員食い殺すと……」

ふーん
随分と頭の悪い鬼だな
もっとやり方はあるだろうに

けど、これはこれで面白い
いい退屈しのぎになりそうだww

「分かりました
お辛い話をさせてしまいましたね
どうでしょう、そのお詫びとして私共でその鬼を退治すると言うのは」

「ちょっと！社くん！？」

動揺するリクちゃんとチョータローくんに微笑みを向け
小太刀を握る

「実は私、腕に少々覚えがありまして
私なんぞでよければやってみますが……
いかがでしょう？」

綺麗に笑みを浮かべればリクちゃんが慌てて強く裾を握る

リクちゃん皺がついちゃうよ～www

「い、いいのか？」

遠慮がちに訊ねる姿にちょーちゃんとのギャップを感じ内心大爆笑なんだけどwwwwwwwwww

「ええ、ただ
私の後ろにいる彼、リクは最近修行中を始めたばかりで
私単独での調伏になります構いませんか？」

「ああ、ああ！！
やってもらえるなら是非！！！」

やめて——www
そんなキラキラ目で見られると笑っちゃうwww

腹筋が痙攣するwww
腹筋崩壊の危機だよお——www

「では、その山へ早速向かうとしましょう
案内を頼めますか？」

「ああ、任せろ」

さーて、退屈しのぎはこれでいいとして
もう一人のちょーちゃんの方は大丈夫だろうか？

何か面白いことになってるといいけどwww

——ズキンッ——

「?! ッグ——」

突如、身体を走り抜けた鋭い痛み

視界が霞み、一瞬

死ぬんだ

……と、確かに感じた

だけど今はなんともない

なんだったんだ？

「社くん、どうしたの？」

心配そうに顔を覗き込んでくるリクちゃんに「なんでもない」と返し歩みを進める

確かに俺は今死んだ

俺じゃないけど

俺は死んだ

嫌な汗を流しながら頭を振る

気のせいだと決めつけて

歩く

今の感覚が実際の事だなんて俺は知らない

「嘘つき」

僕は前方を歩く月のような銀髪の子に聞こえないよう吐き捨てた

太陽のような、蜂蜜のような
明るい金髪を靡かせ

僕は銀髪の子

社の後を追った

〔続く〕

第九話 三人、神社に飛ばされる

空間が歪み、音も光も不協和音を立てながら、
ちょーたろう、ルーシー、ヤシロの三人を包み込む。

「ま、またか。
人騒がせな現象だぜ全く。」

「はにゃはにゃふわーっ！
なのぴよ！」

「何言ってるかわかんねえってばよw ーちゃんおもしれーwワロタ」

その時...

空間の歪みから、黒いものが飛び出して、倒したはずの妖に乗り移った。

「ここは、俺が食い止める！」

と、ヤシロが飛び出したが...

呪文を唱える動作をする前の、あっという間のあっけなさだった。

きっと、本人も気がついていないほど瞬間のことだった。

その化物は、ヤシロを飲み込むように取り囲み、ヤシロを串刺しにしまった。

「うああっ」と言うか言わないかの間だ。

ヤシロは異空間のトンネルに飲み込まれてしまった。

そして、ヤシロは、その場から姿を消してしまった。

残りの2人は、言葉を失った。

「ちくしょうっ！出たり入ったり、現れたり、消えたり
いったいどうなっていやがるんだ」

「ぬーん。
ここは、日本の交差点よりも相当な修羅場だぴょ！

しかし、ちょーちゃん！
ここで、我を見失わないことがシノビの生きるか死ぬかの分かれ道だぴょ...
どんな絶望的な状況でも、心を研ぎ澄ませて、一点に集中すれば、必ず道は開けるんだぴょ。
白刃との渡り合いでも、逃げたら切られるけれども、一歩前に出て相手の懐に飛び込めば勝機は
見えてくるぴょ。」

「ああ、いいこというな...るう。
俺の中で、今のは人生の名言トップテンに入るよ。」

「そして、るうちゃんは、今こんな状況で、イギリスの実家にPSPを忘れてきたことと、そうい
えば、空港の係りの人はせがたかかったなとか、あとトイレに行き忘れたとかそういうことが気
になって仕方が無いのだぴょ...」

「ぶっ。前言撤回...。

お前の言う通りだ。あの妖のところに飛び込んでみるしかなさそうだな。

賭けに失敗すれば、二人とも喰われる。
しかし、死中に活を見出せるかもしれん。」

「ぴょ！」

「よし、せーの、で飛び込むぞ。

って...もう飛び込んだのかよ。」

勢い良く、ルーシーは、化物の中に飛び込み、時空の窓をゆがませている。

「ちいっ！」

ちょーたろうも、後に続いた。

.....

ドスン

「ここは？」

「はにゃー。」

化け物もない。

今までいた、キャンパスも、書類も、ない。

その代わりに、鬱蒼とした森に、鳥居が立っている。

「ここわー——、また日本にもどってきたんだぴょ！」

「これは...俺が、今度は時空を超えたってことだな。
極東の島国か...。」

鳥居をくぐり、境内の隅に見慣れたあいつの姿が....。

「おう、ヤシロじゃねえか。大丈夫だったか？」

「やしろたーん。ふわわーっ」

宙を見つめるように、腰を降ろして座っていたヤシロに2人は話しかけたが....。

「あれ？お前は？
何処かでみたような??」

「ちょーたろう、そしてルーシーだ！
覚えているか、さっきまでの出来事を？
お前は、あの化け物に喰われて...」

「まてってばよ...
全然覚えていないんだ。
俺が、誰で、何をしていたどこから来たのか...」

「一言言えることは、貴様は、チャラくて、IQが低く、何を考えているかさっぱりわからぬバカ女ということだ。逆立ちをすれば、カバになれるが、それはカバに失礼だ。」

「ああ、それはわかる☆

って、てめー———このやろ——！」

「ふふ...それだけの元気がありゃ、貴様は平気だッツ！
...たとえ、何かを忘れていようとな。
そっちの方が都合がいいしな」

「なっ、てめーのことは絶対忘れねー！」

ちょーたろうは、一瞬じっと、ヤシ口の顔を見つめた。
「.....俺はちょーたろうだ。覚えておけ。忘れるな。」

あと、
貴様には、命を粗末にする権利はない。
死ぬな。生きろ。この、馬鹿。
英語に訳すると、horse deer!」

「はっ、オッサンなに言ってるかわかんねーよケラケラw」

「て、てめ...！
やっばそこで朽ち果てるッツ！」

そばで見ていたルーシーは、ニヤニヤしながら「ふふーん」と塀に座って見ている。

「ところでさー。

やしろたーん、きみねー、一度殺されちゃってたんだよ？」

「はっ？そんなわけねーじゃんw」

「話が進まないから、そういうことで受け入れろッ！」

「...ああ。

だったら、今ここにいる俺はなんなんだ？

いったいどうなっているんだ？この世界は？」

「俺にもよくわからん。

これは、まるで、俺たち三人に与えられた壮大な謎解きのような気がしている。

そして、ここで俺たちが出会ったことにも、必ず何か意味があってそうなっているはずなんだ。

その隠された意味と秘密を探らなければいけないんじゃないか？

それも、三人、力を合わせて？」

(続く)

第十話 社とヤシロ、対面する

淀んだ空気の中

辿り着いた山奥の洞穴で俺は意識を集中させていた

敵の数は14...いや16

強さは雑魚が殆どでそこそこなのが2匹

別格に強いのが1匹

ふはっなんだよ楽勝じゃん☆

この程度で此処等を統べてるつもりかよw

「二人はそこで待ってて☆」

俺の目に映る三メートルはありそうな鬼達に鋭い靈力をぶつける

そうすれば触発され、雄叫びと共に飛び出してきた

「オンキリキリバザラウンハッタ！」

印を結び二人の周りに結界を張り、舌でペロリと唇を舐める

さあ、狩りの始まりだ



近くの木を伝い、高く飛翔した社くんは肩に掛けたら銀の狐と桜の美しい刺繍の入った上は薄い水色で下に向かうにつれて暗く、裾は黒と言えるグラデーションがあった袴を翻し（なぜ落ちない！）

黒い中華服の袖に隠した小太刀を素早く抜き、鬼と思われる化け物に突き立てた

嫌な音を立て、切り離された腕が地面に叩き付けられ一瞬で灰と化す

劈く鬼の咆哮に耳を塞ぎ耐える

月明かりに照らされた社くんの銀の髪がキラキラと光を帯びているように見える

聞くに耐えない肉を切断する音と、化け物の断末魔の中

社くんは‘笑って’いた

言い知れぬ恐怖心を胸に抱え、終わるのをただただ待つ

「オンアピラウンキャンシャラクタン！」

恐れを抱く音の中に凜と澄んだ声が時おり聞こえる

「ナウマクサンマンダバザラダン、センダマカロシャダソワタヤウン、タラカタンマン！」

数珠を鬼に突きだし、社くんに向かった空気を震わす恐らく【妖気】と呼ばれるモノである刺すように鋭い力を彼の手にある数珠が大きく揺れ

その力、その波動を跳ね返す

「なんだ、まともな攻撃もできるじゃん☆」

ニヤリと意地の悪そうな笑みと軽やかな声音が、彼がこの状況を心底楽しんでいることを物語る

つい、と

隣に視線を向ければ驚愕と不機嫌を織り混ぜたような表情を浮かべるチョータローさん

何を考えてるのか分からないけど、握り締めた拳が力を入れすぎて白くなっているのが見て取れた

残りの鬼の数は4匹

グアアアアアアアアア！！！！

激しい咆哮が3つ重なり、大きく空気を震わし

‘残り1匹’

ひときは大きく、血のように赤い身体

きっとあれが親玉だ！



「チッ」

他の鬼と同様に切り付けたのに聞いてない

スライムのように傷口がすぐにくっついてしまう

ダメージは零だ

「なら、これならどうだ！」

袖から符を抜き出し、眼の前でそれを構え
俺は目を閉じる

意識を集中

大木のような赤い腕が俺へと振り落とされるその刹那

ギンッと獲物を捕らえる狐や猛禽類のような鋭く尖った視線を敵にくれてやり
腹の底から力を込め、声を出す

「万魔拱服、急々如律令！」

鎌鼬のように刃を含んだ風が鬼へと叩き付けられる

やったか？

劈く汚らしい悲鳴ともとれる咆哮を聞き
目を凝らす

しかし、そこには信じたくない現実

「無傷、だと？」

いや、すごいスピードで傷が回復してるんだ！

これは不味いかもな……

「リクちゃん、チョータローさん

ここは一旦引きます！」

結界を解き、二人の手を引き山を降りる

途中に罫や結界を張り、奴が山を降りれないようにしながら



くそ、何でだ

あそこまでの回復力は一体何なんだよ！！

予想外の事態に苛立ちが募る

元いた神社に戻った俺は少し荒れていた

何故回復する？

何故.....

「社くん、血が.....」

恐る恐る話し掛けるリクちゃんが指を指した先には七分丈のズボンから覗く左足から流れる紅

木の枝か何かで薄く切ったらしい

まあ、問題ない範囲だな

「へーきだよ☆

それより、アイツ俺の攻撃をものともしなかった

あの回復力は厄介だな」

「けど凄かったね

いっぱい居たのに今は親玉らしい赤い鬼だけだよ」

励ますような言い方
気を遣ってくれてるらしい

「けど、親玉が倒せなきゃ意味ねえんだよなー」

ガリガリと首筋を搔き思案する
どうすれば倒せるのかを……

「おい、そのしゃべり方」

眉間に皺を寄せ、神経質な尖った声音が鼓膜を揺らす

ちらりと声の方を見やれば苛立ったチョータローさんが俺を睨み付けていた

「しゃべり方？
あーこっちが俺の本来のしゃべり方
気に入らない？」

茶化した言い方に更に表情を険しくする彼にクスリと笑みを漏らす

不機嫌だねえ
そんなんじゃ幸せが逃げてくぜー？

険悪な雰囲気はその場を支配し
重苦しいピリピリとした空気が更に雰囲気を悪くする

それに耐えかねたのかりクちゃんが「あの！」と声をあげた

「社くん、一旦ちよーたろーさんに連絡とって見たら？
あの人頭いいし何かヒントをもらえるかも
そうでなくても、今の状況を報告した方がいいと思うんだけど」

どんどん声が小さくなるリクちゃん
だけど

「確かにそうだね
確かあの時はカフスピーアスから……」

カフスピアスに手を当てて霊力を送る

鼓動が聞こえ始め、あの‘窓’が現れる

「なっ?!」

なんかチョータローさんがめっちゃ驚いてるけど
そこは無視だ無視

「ちょーちゃんやっほー☆
報告に上がりましたー☆ミ」

神経質そうな視線が俺を射貫く
ってあれ?

俺が、いる?

『うっわああああ！俺がいる！
ドッペルゲンガー？ダブル？
何々？君誰ー！？』

目をキラキラと輝かせ俺を見つめる向こう側の俺らしき人物

濁りのない純粋な瞳

ああ、コイツ

何も知らないんだ

「気持ち悪」

思わず口から漏れた言葉に向こう側の俺はきょとんとした後、眉根を下げしゅんと悄気る

あー苛々する

何も知らないんだ子供の目

地獄を知らない餓鬼の目

安息の地でぬるま湯に浸かり、ぬくぬくと過ごしてきた幸福者の目

俺が手に入れることの出来ない偽善者の目

『ねえ、君は』

「黙れ偽善者！！！」

涙目で俺を見つめる向こう側の俺に声を荒げる

なんでなんでなんで！！！！

『おい社？』

『向こう側の赤目さんどうしたんだぴよ！？

』

「社くん？」

ちょーちゃん、知らない女の子、リクちゃんが何か言ってるけど知るか！

俺は窓越しにいる間抜け面を睨み付ける

「そんな目をするな！

忌み子の癖に、殺すことしか能の無い餓鬼の癖に！

なんで俺と違う目をしてる！！
殺しを知らない目をしてる？！
さっさと死んでしまえ！！！！！！」

大っ嫌いな顔を睨み付け、思ってることをぶちまけると俺は山へ向かい走った

殺したくて仕方なくなった

はやく、はやく殺さないと

俺の存在価値がなくなる



社くんがその場を離れても‘窓’は消えなかった

窓を形成する力の所有権が僕かちよーたろーさん、金髪の女の子の誰かに移ったんだと思う

『なんで……』

窓の向こう側のヤシロくんが涙目で項垂れる

見た目は似てる

けど、性格は走って行ってしまった社くんの方がかなり捻くれてるようだ

『おい、そこにいるのは俺か？』

あああああ！

しまった！！！！

もう一人同じ人物同士が居たんだ！！

どどどどうしよう!?

「そ、そうみたいですすみません!!!
喧嘩しないでくださいすみません!!!」

ああ、前途多難だ.....

〔続く〕

「秘密…？」

ヤシロが聞いた。

「うむ…
三人とも、それぞれどういう経緯でここまで来たか言ってみろ。」

「オ 俺は、思い出せない」とヤシロ。
「ただ、漠然と、血と孤独と、それでいてふざけたイメージはあって」

「るうたんは一っ！
日本の奈良に来て、
鹿のしんのすけに乗って、山の中の鳥居にきて、飛んだら、
ちょーたろうのところでみんなと出会って、

あれ、またここ日本の鳥居かにゃ？
はにゃー？」

「俺は、
ボストンの大学の理学研究所にいたんだ。
すると、社、お前と出会い、
次に、気弱そうな、少年が降ってきて、
次の次に、社と少年の二人とも消えて、
次の次の次に、水道管の中から化け物というか鬼というかが出てきて、
次の次の次の次に、もう一人のヤシロが出てきて、
次の次の次の次の次に、ルーシー、お前が出てきて、
次の次の次の次の次の次に、今この場所にいるというわけだッッ！
次の次の次の次の次の次の次は、何なんだよもうっ！！？」

はあはあ…

ゲシュタルトが崩壊してきたよ。

ゲシュタルト崩壊とは、
同じ漢字を見ていると、
あれ？こんな漢字ってあったかな？

となる現象のことだ。

次次次欠ン欠ン人」

「ほげ————ん」

「ぎゃはは！超うけるw」



その時、
神社の虚空に、「窓」が唐突に出現してきた。

窓には、
鬼と戦っている少年たちの姿が見えた。

そこで、眼を鋭く光らせ、嬉々として、鬼を倒している年端もいかな
い社の姿が見えた。

「これは…俺なのか？」
と、ヤシロが呟いた。

確かにそれは「俺だ」って分かった。
《俺は…俺自身を知って、恐ろしくなった。》

「ありゃ、この私も写っているではないかッッ！」
とちょーたろう。

それにしてもあまりにも、この俺には覇気がない。
認めん！
認めんッッ！」

「ぎゃははっ！
こっちにいる、兄ちゃん、こっちの兄ちゃんと正解違うなっw」

「それは、貴様もだろう・・・」

「るうたんだけ、いない…ぐずん」

「大丈夫だよっ！」
「ああ、きっと大丈夫だ！」
と二人に慰められるルーシー。

その時、
窓の向こうの社がこちらを睨みつけるようにして、こちらを覗いた。

冷たく残酷で、人間味のないようであり、
それでいて、何かに怯えているような…。

誰とも、心を通わせられずに、心を閉ざしながらも、明るくチャラ
くふるまうことしかできない。

その時窓のこちらがわの、ヤシロは、今までの記憶を少しずつ取り
戻して行ったようだった。
と同時に、思わずよろめく。

「大丈夫か、ヤシロ」

ちょーたろうがヤシロを抱きかかえる。

窓の向こうの社は、こちらに向かって、いかったような、悲しそう
な目つきで、なにか叫びかけるが、こちらには聞き取ることができ
ない。

あんなにチャラっぽく振舞っていたヤシロは向こうの世界の社が語
ることを理解したのか、
耳を塞ぎながら、下を向いている。

ルーシーが、ヤシロの肩をだいて言う。
「大丈夫だよ！るうたんがついているからね！」

「やかましい…俺の気持ちがお前らにわかってたまるか…！」
と、そばの二人を振りほどく。

「みんな、そうやって、忌み子の俺に同情するふりをして、結局、何も助けてくれないんだ。どいつもこいつも。」

…ああ、そうやって、俺はいつも孤立して行く。

もういい、ほっといてくれ！

表面的に明るく振舞って…孤独が俺の性分なんだよ！」

「…」

「…」

境内に沈黙が流れた。

その時だった。

ヤシ口のうずくまった背中から、黒い気のようなものがもくもくと出てきて、それは形をとった。

ヤシ口はそれに気がついているのかいないのかわからない。きっとうずくまって自分のこと、自分の過去のトラウマしか見えなくなっているのかもしれない。

その黒い塊は、鬼の形をして、血を口から垂らしながら、嗤っていた。

「ひよっとしたら、ルーシー」

「びよ？」

「この化け物は、ヤシ口の心の闇に巣食い、彼を苦しめている負のエネルギー集合体かもしれん。」

「なんでそんなものがあるびよか？
あと、きっとヤシ口さんは、おんなのこだびよ！」

「し 失礼した。あまりにも女には思えぬもので。」
少し顔を赤くする、ツンツンのちょーたろうは、ちょっとデレにな

った。

「理系の俺に聞くな。

人体を構成するエーテル体やアストラル体の波長が荒く、負の電化を多く持つと、次元を超えて、同じような負の波長を持ったエネルギー体、つまり化け物が磁石のように近づいてくる、と聞くがきつとそれだ。」

「じゃあ、やつを倒すいい方法があるぴょ！」

「わかるのか？ルーシー？」

ゴソゴソ

「このけん玉で！」

「な、なにかそれには特殊な仕掛けや霊力があるのか？」

「ふつーのけん玉だぴょ？
これで、遊べば、いいのんっ！」

「は？
おい、お前が天然ってことはよくわかっているが、今は真面目にやれよ！」

「まったく、なんで、こんなちょっと抜けた娘がいるんだ…」

「…

「ちょーちゃん！」

「これは、真面目なんだぴょ！！」

(続く)

———ねえ、おれいらないこ？

そうだ、望まれなかった忌み子だ

———どうして？

妖狐と天狗の合の子だった奴の先祖返りでアルビノだからだ

———どうしてそれがだめなの？

アルビノは災厄をもたらす鬼の子
妖狐と天狗の血が強すぎる俺は化け物だ

———だから、ははうえは、おれをころそうとしたの？

そうだ、お兄ちゃんとじい様が止めなきゃここに俺はいない

———じいさまはどうして、おれをたすけたの？

力のある俺は利用できるからさ
だから俺は後継者に成るため、男として育てられ、陰陽師になった

———かなしくない？くるしげない？さみしくない？

そんなもの俺に必要な
持ってちゃ生きていけない

———よわいね、きみはひどくよわい

分かってる、そんなこと
こうするしかないんだ、それに俺には式達がいる
それで十分だ

———ほんとうに？

.....

———きみの、のぞみをかなえてあげようか？

……………対価が必要だろ？
なら俺はいらない、払えないよ

————おくびょうだね

ああ、そうだな
俺もそう思うよ

————しかたないな—、たすけてあげる！

な、なんで？

————だっておれはきみだから

————だいじょうぶ！つらいのはいっしゅん！すぐにおわるよ

辛いのは一瞬？
終わるのか？俺の苦しみが！

————ころしてほしかったんでしょ？しにたかったんでしょ？

————むりにへらへらわらって、ころしに、じぶんのそんざいを
みいだして

————ころすことでしか、じぶんのそんざいをかくにんできない
から

————やりたくもないのに、まわりのきたいにこたえようところ
して……………

————コロシテコロシテコロシテコロシテコロシテコロシテコロ
シテコロシテコロシテコロシテコロシテコロシテコロシテコロシテ
コロシテコロシテコロシテコロシテコロシテコロシテコロシテコロ
シテコロシテコロシテ

俺は…



「はあ、はあ……………」

山の中で走った俺は開けた場所にある大きな大木の前にいた
辺りは小さな公園くらいの広さで、あの神社より澄んだ空気で満た
されていた

その中央に佇む大木

子供が10人ほど手を繋いで輪になった位の太さのある大木で、俺
は大木に寄りかかり身体を休めた

キラキラと月明かりや星明かりとは別に、自ら光を放つ大木のお陰
で明るい

おそらく、大木自体が神格化し
大木から溢れ出る清浄な気、オーラが、蛍のように光っているんだ
ろう

木が大きすぎて空を見ることは出来ないが、清々しい空気が心地
好く、自然と気が緩んだ

「お兄ちゃん、俺はちゃんと生きてるよ」

独りなのは分かってる
だからこそ呟いた

優しく、聡明で、勇敢で、少しズル賢い
自慢のお兄ちゃん

思い返し、笑みが溢れる
じい様以外で唯一俺とまともに接してくれた人

唯一、俺に微笑み、名前をくれた人間

大好きで、大切に、いつも一緒に付いて回った

カルガモの親子のようだとじい様にかからかわれたこともあった

それくらい一緒にいた

その所為でお兄ちゃんが一時期虐められたから離れようとしたこともある

けど、社は悪くないからって
俺は、社の事が大好きで大事な妹だから一緒に居るんだって

その言葉に救われた

太陽のような金色の髪と浅葱色の宝石のような瞳が懐かしい

大好きなお兄ちゃん

だけど

俺の所為で……………

死んじゃった

俺の力が一番集中している眼を狙った術士の集団に右目を抉り取られた

もう片方も取られそうになった時

お兄ちゃんが来てくれた

術士を倒して、俺の名を呼び、俺より痛そうな顔をして泣いてくれた

そんなお兄ちゃんの後ろから辛うじて生きていた術士の1人が、お兄ちゃんにナイフを降り下ろした

俺は、何も出来なくて

真っ赤に染まったお兄ちゃんが地に伏せてるのが見えた

俺、気が動転してその場にいた術士を皆殺しにした

初めて人を殺めた

けど、出血しすぎた俺もお兄ちゃんの隣に倒れて……

そしたらお兄ちゃんすごく悲しそうな顔して俺の頭を撫でた

俺もお兄ちゃんも死ぬんだって

諦め掛けたとき

【社、お前だけは生きろ】

その言葉が聞こえると同時に俺は、意識を手放した

起きたら布団の上で
夢だと思った

だって両目があったから

けど違った

目の色が変わってたから

血のように紅い両目が
片方だけ、明けかけた夜空のような深い青色に変わっていたから

憂いを含んだお兄ちゃんの瞳
色が違うけど分かった

これはお兄ちゃん目だって

じい様に聞いたら俺の予測通りで
お兄ちゃんは俺を助けるために死んだんだ

俺を助ける命懸けの術の所為で色は変わってしまったけど、これは
お兄ちゃん目なのだ……

葬儀の時に見たお兄ちゃんの右目は窪んだ瞼から眼球が無いことを
知ることが出来た

お兄ちゃんのお陰で俺は生きている

最初は申し訳なくて
悔しくて、悲しくて……

存在価値が無くなってしまったように感じて

ぽっかり空いた心の穴を埋めるように俺は殺しに勤しんだ

それでも罪悪感が俺を責める

だけど死んだらお兄ちゃんを裏切る事になるから

這いつくばって生きてきた
泥沼に頭を押し付けられるような生活も
お兄ちゃんとの思い出があるから生きていられる

お兄ちゃんは俺の中で、この右目で生きてるから

「俺は死ねない」

頭の中で語りかける鬼にそう返す

幼い頃の俺の声で話し掛ける鬼に…

「つい、苛立って向こうの俺に酷いこと言っちゃったな
謝らないと……………」

けど、アイツはどうして俺と同じ様に左右の目が違うのだろうか？

疑問に思いつつ睡魔に思考が霞む

神聖で、柔らかく、暖かい大木の醸し出す空気に瞼が落ちる

目が覚めたら、目が覚めたら神社に戻って謝ろう

あんなんじゃお兄ちゃんに怒られちゃう

「お兄ちゃん……………」

大好きなお兄ちゃんを思い浮かべ、ゆったりとしたまどろみの中

俺は意識を手放した



ふわふわで、さらさらした触り心地のいい社の髪を撫でたウサ耳帽子を被った優しげな少年が降り立つ

スヤスヤと眠る社の表情が幸せそうに緩められる

それにつられ、ウサ耳帽子を被った金髪の少年も頬を緩め
憂いを含んだ浅葱色の瞳を幸せそうに細めた

「世はお主の兄ではないが、せめてもの詫びだ」

そうひとりごちる少年はしばらく社を優しく優しく撫で続けると

名残惜しそうに手を離し

「もう少し、寝かしてやってくれぬか？」

大木に笑いかける

《勿論だ》

短く返された返答に満足気に笑みを深めると
足元に魔方陣を描き、その場から姿を消した



ああ、どうすればいいんだろう……

視界に映るカオスに頭を抱える

窓の向こうでイヤイヤと幼子のように首を振るヤシロくん

いや、ルーシーちゃんと言うには女の子らしいのでヤシロさんか…

彼………彼女は時折ビクリッと方を揺らしては、床に涙の染みを作っている

それに対して、ちょーたろーさんはヤシロさんが肩を揺らす度に拳動不審になり
ルーシーちゃんも慰めようとしては止まりを繰り返している

考察を披露したちょーたろーさんにルーシーちゃんがけん玉を出したりと
向こう側は忙しない

どうしよう……

社くん、じゃなくて社さんを探しに行った方がいいだろうか？

それとも打開策を一緒に話した方が……

ぐるぐると廻る思考の波の中

目まで回ってくる

叫びだしそうになった

その時、チョータローさんかおずおずと口を開いた

〔続く〕

やばい、向こう側が黒く染まってる

どうすればいい？
どうすれば、この事態を諫められる？

隣に並んだチョータローさんは微動だせず、事を見守っている

何かあるはずだ、何か……………

「まる たけ えびす に おし おいけ～」

澄んだアルトが、突然、鼓膜を揺らした

「あね さん ろっかく たこ にしき～」

優しい歌声
安心する、そんな声

これは確か、京都の通り数え歌だ

「し あや ぶっ たか まつ まん ごじょう
せきだ ちゃらちゃら うおのたな～」

底の厚いブーツのような足音が木霊する

耳に優しい、落ち着くテンポ

「ろくじょう ひっちょうとおりすぎ
はっちょうこえれば とうじみち～」

輝く銀色の髪が月明かりに照らされ
風に舞い、清々しい空気が辺りを包む

「くじょうおおじでとどめさす〜♪」

血のように紅い瞳と、憂いを含んだ青い瞳
紛れもなく、あれは！！

「社、さん？」

幾分か落ち着いたのか、困ったような笑みで小首を傾げる彼女

何故だろう、少し
変わった？

「おーい、向こう側のヤシロちゃんやい」

おちゃらけた言い方で話し掛ける社さんは何がしたい？

何故戻ってきた？

疑問が膨れ上がる

「そんなんでいいの？」

お兄ちゃんが悲しむよ？」

ピクリ、喚き散らしていたヤシロさんが大人しくなる

「俺には、俺達には
見てくれる人は、認めてくれる人は、愛してくれる人は、お兄ちゃんしかいない
その目はお兄ちゃんの最後の最期に俺達にくれたプレゼント
生きてる証だろ？」

何の、話し？

「目がある限り、お兄ちゃんの右目が有る限り
君は独りじゃない

お兄ちゃんに言われたんじゃないの？
生きろって」

静かに、静かに
時が過ぎる

静寂がその場を包み、ここにいる人間の目が、社さんに向いている

「俺にも鬼は話し掛けてきた

殺してあげる、楽にしてあげるって」

「え、それ本当?!」

思わず出てしまった疑問に、慌てて手で口を塞ぐが時すでに遅し

苦笑いの社さんが、ゆっくりと頷いた

『それで、君は何て答えたの?』

幼子のような弱々しい声
これは向こう側のヤシロさんの言葉

「あゝ あ?
んなもん決まってるだろうがバァカ

俺がここにいる時点で答え出てるだろうが」

口悪っ！？

いきなり滅茶苦茶口調が荒々しくなったんだけど！！？

『っ！？

な、そのな言い方ねえだろ！！

性格悪いなアンタ！』

「ハッ！お互い様だろおが

んで、1つ気になってたんだけど

その右目、アンタのお兄ちゃんから貰ったものだってことは分かる

けど、経緯は分かんねえんだよ

お前、人殺したことねえだろ？

どうやってその目を受け取ることになった？」

だめだ、話しに全然ついていけない！！

ここは静観してる方が良さそうかな…

『あ、当たり前だろ！

人殺しなんて！！

俺は、アルピノで周りから嫌厭されてたけど兄ちゃんだけは違くて
兄ちゃんは俺をじいさんと一緒に育ててくれた

けど、俺は右目を

兄ちゃんは心臓を病んでしまった

そんなとき俺、まだまだちっさくて、兄ちゃんは余命宣告されたって
こと理解できなくて

あんまり覚えてないけど、兄ちゃんが死んでしまう前日、俺に言ったんだ

【ヤシロは悪くない、弱い俺が悪いんだ】って

【俺は無理だけどヤシロには生きていて欲しいから、俺の目をあげるね】って

それで、気が付いたら右目は見えるようになっていて、兄ちゃんは居なくなってた…』

そんなことが……

静まり返ったこの地で、ヤシロさんに同情の目が向けられる

違う容姿は差別されやすい

一人きりの彼女の心の拠り所だったそのお兄さんを、失った悲しみと絶望は計り知れない

葬式のような空気が漂う中、一人
せせら笑う人物が……

「なるほど、つまりアンタは温室育ちのお坊っちゃんな訳かww

いや、一応女だからお嬢ちゃん？」

は？

今のどこが温室育ちのお坊っちゃんなんだ？

『おい、どういう意味だ？』

恐る恐る訊ねるちょーたろーさん
ルーシーちゃんも聞いたそうに大きな瞳を社さんに向けている

かく言う僕も同じく彼女に視線を向け

チョータローさんとヤシロさんに限っては呆けている

そんな視線を一辺に受ける彼女は相変わらず笑みを浮かべて、何を

考えているのか分からない

「知らない奴に目玉抉り出された訳でも
自分が無力なばっかりに目の前でお兄ちゃんを殺された訳でもない
んだろ？」

んじゃ、マシじゃん！
あれすげえ痛いんだぜ？
麻酔なしで押さえ付けてやるもんだからショック死するかと思った
しww

お兄ちゃんを守るどころか最期まで気を使わせちゃったし

自分の無力さを痛感した
そんなとき襲ってきた奴等皆殺しにしたけど気分なんて晴れないし最
悪

だけとお兄ちゃんが【生きる】って俺に言ったんだ
俺にはその言葉は絶対
お兄ちゃんのお願いを俺は絶対に破らない
お兄ちゃんを悲しませる奴は誰であろうと殺す

そしてアンタはパラレルワールドってやつの俺らしいじゃんw
なら、俺はアンタを生かさなきゃならない
お兄ちゃんのお願いの為に……

アンタはどうなの？」

終始笑顔で語られた壮絶な過去

そして、凄まじいまでの依存心

彼女はお兄さんに完全に依存している
それしか残ってないように……

ゾクリと背筋に嫌な汗が流れ、息が詰まる

誰かの息を呑む音が微かに聞こえ

その場の緊張感を忠実に伝えている

「で、どうなの？」

てか、痛くないのそれ？w
見た目似てるからかなり滑稽なんだけどwww
大丈夫？wwwww」

黒い靄に牙を突き立てられている彼女に対して
一人、緊張感皆無の社さんはゲラゲラと笑いながらヤシロさんを指さす

「コラッ！人に指指しちゃ駄目だろ！！」

「突っ込みどころそこなのチョータローさん！？」

「ぶはっ！wwwwwチョータローくんお母さんみてえwwwwwwwwww」

お母さんなんて話したことないけどwwwwwwwwww」

なんでこんなに笑ってんの？！
あと、所々発言がブラックだよ！！

『あ、あの、俺は…………』

「ちょっ、やめてwwwwww
俺と同じ顔で泣かないでwwwwwwwwww
ひいwwwなんか小動物っぽくなってるからwwwwww
似合わないwwwwww凄まじく似合わねえwwwwww
俺って例えられるの猛禽類とか狐の筈なんだけどwwwwwwwwww」

空気読みなよ！！

なんなのその爆笑！！！！

もう一度言うよ？

空気読みなよ！！！！！！

『少しは場の空気を読まんか！！』

あ、ちょーたろーさんも同じこと思った
流石僕らのお母さん

って違う違う！！
ちょーたろーさんお母さん違う！！！！

『本当にお母さんみたいだぴょ……』

駄目だ、ルーシーちゃんまでノッてきちゃった……

場の空気が完全に社さんによってコントロールされてしまってる

『もう！なんなんだよ！！！！』

顔を真っ赤にして怒るヤシロさんに社さん爆笑

けど、あれ？
黒い靄が薄れてきてる？

「だってプルプルしながら涙目なんだもんよwww
これを、からかわないなんてww有り得ないでしょwwwwwwwwww」

『なんだと！このブラコン！！』

あまりにも笑いまくる社さんに痺れを切らしたヤシロさんは耳まで真っ赤にして怒鳴る

しかし社さんは何処吹く風と笑い続ける

「ちょっwwwwwwそれ确实wwブーメランwwwwwwwwww」

全くもってその通り

同一人物なんだから二人ともブラコンに決まってるww

『うじゅ〜〜〜！！』

更に赤くなり、羞恥心からか目に涙を溜め、社さんを睨み付ける

が、残念！

体育館座りのため、上目遣いになり全然怖くないwww

寧ろ小動物っぽさがUPしてるwwwwww

「くっwwふふっwww」

隣のチョータローさんが笑いを堪えるのに必死だwww

よく見ればルーシーちゃんやちょーたろーさんも必死に笑いを堪え

、肩が震え

たまに笑い声が漏れているwwww

まあ、それは僕もなんだけどwwwwwwwwww

「ひいwwwwwwwwwwその口癖wwwwwwww

やめてwwwwww俺もたまにしちゃうからwwwwwwwwwwwwwwww

その口癖本当に悔しいときにやるやつじゃんwwwwwwwwwwwwwwwwwwww

なんなの！？wwwwww

貴方ワタシの腹筋を崩壊させるつもり！？？

させないわ！

なんたってワタシは愛と正義のプリティーヒーロ『やめろおおお

おお！！！！』」

駄目だwww、場がwwwカオスwww

『やめろwいきなり女口調にwwな、なるなwwww』

隠しきれてないよ！

隠しきれてないよちょーたろーさん！！

けどすごく同感！！！！

もう！はじめのシリアスどこ行った！！

もはやシリアルだよ！

シリアス仕事しろよ！

『バカバカバァカ！！！！』

罵りのボキャブラリー少ないよヤシロさん！？

「けど事実じゃーん☆wwwwwww

さて、少しは落ち着いた？」

『っえ？———あ……』

散々ゲラゲラと笑ってたのが嘘のようにふわりと微笑んだ社さん
そんな笑い方出来たんですね…

「癩癩起こすのは俺も一緒だからあんまり言えねえけど
取り敢えず笑っとけ」
そう言った彼女は、ニシシと作り物じゃない満面の笑みを浮かべた
窓の向こう側のヤシロさんに纏わり付いていた黒い靄は
真夏の陽炎のように
不確かで、儚い、空虚な存在になっていた
ほんの少しだけ、存在を示すようゆらゆら揺れ
漂う存在に

〔続く〕

.....

我を失い、うずくまるヤシロと、ヤシロから出てきた黒い鬼に対して、ちょーたろうは手をこまねいていた。
いや、それにしても、そばでけん玉あそびをしだすこのルーシーにちょーたろうはイラっときた。

「おい、こら、このクソガキ！この非常事態にてめーは何関係ないことで遊んでんだ！ふざけんな。」

「はにゃー！
関係なくないぴよ！」

「いいから、黙ってるぴよ」

「…あ、ああ」

ちょーたろうは、ルーシーがしっかりやるなと何処かで感じ取ったのか、
見守ることにした。

(いったい、どうする気だ。
あんな武器にもならないし、霊力とやらもないものを使って…。)

「やしろたん、やしろたん、だいじょうぶだよ。だいじょーぶっ！」

そのとき、うずくまっていたヤシロが泣くように呻き始めた。
「兄ちゃん…兄ちゃん…ごめん、ごめん…」

それと同時に、ヤシロにとりついていて、黒い影が炎のように燃え盛るのがわかった。

「おいおい、ルーシー…あいつ、あの黒い炎に飲まれてしまわねえのか」
ちょーたろうは、ハラハラしながら、少し離れて見守るだけだ。

「俺は、殺した殺したい殺したい生きている資格なんてないんだ
うあっ
はあはあ、
やらなきゃやられる。
誰も俺のことなんか、うあああああっ」

あんなに明るかったヤシロが、今、見たこともないほどに気を動転させている。

ルーシーは、それに一切とらわれることなく、ニコニコ顔でそばにいる。

「はっ、そうか、
あの影は、ヤシロの心の投影が化け物になったものなのかッ？」

ルーシーの周りには、ほのかな明るいオーラのようなものが出ていて、そのオーラが闇の侵入を抑えているようだ。

「やしろたん、やしろたん、一緒に遊ぼうよ。
けんだま、知ってる？
今、すごくはやってるんだぴょ？
やしろたんにもできるよ！
ほら、こうやってこうやって！
はにゃー！失敗した。もう一回！」

「何やってんだ、あいつ、そんなので…」

しかし、ちょーたろうはは感じ取ったようだ。
その球の動きと、十字架のような棒が結界のようなものを作っていると。

「霊力…あるじゃねえか。けんだま。」

ルーシーが、無邪気に遊ぶたびに、光の精霊が踊るように周りに散らばって結界を作っている。

そして、彼女は黒い影を見事に押さえつけ縛り付けているのがわかる。

「…お、おれは、どうせひとりぼっちなんだ。
誰の輪にも入れない。不幸な忌み子。」

どうせ俺なんて。」

化け物の牙とも爪とも分からないのものが、ヤシ口の胸に食い込んでいるのがわかる。

そばでちょーたろうが叫んだ。

「そ、そんなことねーぞ！
貴様はなあっ！
確かに、バカだ！低脳だ！ものを考えない！
ああ、どう言っていていいかわかんねえツツ。

だけどツツ

だけどツツ…

貴様はツツ俺を」

言い終わらないうちに、化け物がヤシ口の胸を突き破り、地面に転がした。

「ちいっ！

この化け物め！
おれが倒してやるツツ！

るうたん！
なにか俺に使える武器をかせっ！！」

「そんなものはないぴよ！ちょーちゃん！」

「あるじゃねえか！
けん玉とか、ヨーヨーとか、あとなんかよくわからないものがゴチャゴチャ！
何が霊力がないだ、嘘つきやがって！」

「ち、ちがうぴよ、ちょーちゃん！
るーちゃんはねっ！本当に遊んでるだけなんだぴよ！
るうたんのママもね、ばあばもね、るうたんは何回も教えてくれた

んだ。

『大変な時ほど遊べ、ピンチの時ほど楽しめ。そうすれば必ず聖なる守りと良き運命の流れがお前に訪れん』って。それで、るうたんは、いろんなピンチを乗り越ってきたんだぴよ！」

「じゃあ、せいなる守りってのは…
るうたんにもいつもついてるこれらの精霊ってわけか」

「でも、るうたんも、ちょーちゃんも
この化け物を倒すことはできないぴよ」

「何だと？」

「やしろたんの、この化け物を倒すことができるのは、
やしろたん本人にしかできないんだぴよ。」

「おい、冗談じゃないぜ、
この陰陽師の女は、もう、蛇に飲まれつつある蛙だぜ。どうすることもできないのかっ！？」

「自分自身が、霊力を奪われずに、光のオーラを出す以外ないぴよ！」

その時、ヤシロかその影かわからない声がボソッと言った。

「お前は、いいなあ。
みんなに愛されて、どんな状況でも楽しめて。

いいじゃないか。
お前らだけで、幸せになればよ。

結局人は裏切るんだ。

どうせ、お前みたいな天真爛漫な奴は、人の苦しみなんてわからない。

お前みたいな奴がいるから…俺は、俺は苦しいんだ。
あっちに行け！」

ルーシーの光のオーラが、消えかかり、そこに闇が入り込んできた。
ルーシーはとても悲しそうな顔をしながら、涙目になる。

「ギャハハッ！
あっちいけ！あっちいけ！
死んじゃえ！！消えろ！！」

化け物がそう言って、黒い炎を吐いてくる。

「やしろたん、死んじゃうぴよ！
そのままじゃ。
その化け物に喰われて、黄泉の世界に連れ去られて、ずっと閉じ込められたままになっちゃうぴよおおおおお！」

「はあ？笑わせらw
そんな化け物どこにいるってんだ？」

「おい、お前陰陽師のくせして…自分に取り憑いている奴が分からないのか？」
と、ちょーたろうが叫ぶ。

黒い影が嗤いながら、ちょーたろうに向かって炎と毒を吐きかけた。

「ちょーたろう…
お前も、所詮ひとりぼっちの人間だろう。
周りに馴染めず、
研究者や学生からは嫌われ、
お前は、あらゆる他人を見下し、
嫌な嫌な人間で、
いくら頭が良くても、誰からも必要とされないし、邪魔な人間。」

なあ、正直に言えよ。
お前は、この女陰陽師を支配しようとしている。心配しているふりをしながら。

だってお前は、自分以外の誰も愛していない惨めな男だからだ。これから一生。
一生お前は冷徹で孤独なままだ。」

「だからなんだよ。

なんだってんだ、てめえ。」

「ギャハハ！凶星か？凶星でしょう？」

「てめえ！このやろうツツ！」

「ちょーちゃん！
いかっちゃだめなのん！
相手の思うツボぴょ！」

ルーシーがちょーたろうをおさえつける。

しかし、
ちょーたろうは、今までにない恐ろしい目つきで黙ったまま、ヤシロー影に近づき、
無言で、ポケットから携帯用のLEEDを出す。
そして、嵌めていたブロックを解除する。

「…それはなんだ？」

「小型の…光子爆弾だ。
説明する余裕もないほど、俺は今、てめえにブチ切れている。」

「ギャハハツツ！やっぱり思った通りだ！器も肝も小さい男！
爆発させてみる！ほれほれ？」

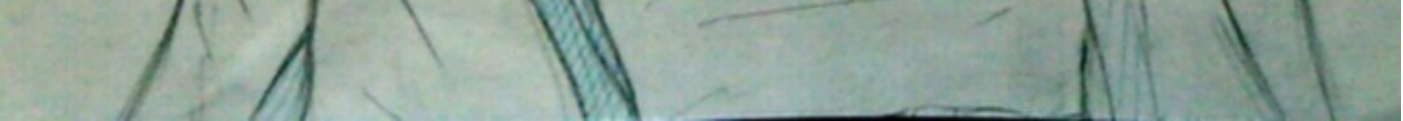
「消えろ！！！」

「やめるびょー！
そんなことしたら、もうちょーちゃんも、とりこまれるんだびょー！」

(続く)

第十八？ 僕は僕自身に依存する。





今、小さく
だけど確かに、彼女は
一瞬だけ見えた少年を《兄ちゃん》と呼んだ
それは社さんも同じで

酷く驚いた表情をし
その後、穏やかに笑った

「皆、ありがとな！
お兄ちゃん以外の人間に助けられるとは思わなかったよww
さてと、俺のは解決したから次はちょーちゃんだなw」

ニシシと笑い、社さんはちょーたろーさんとチョータローさんに視線を向ける

笑ってるけど、僕はそれよりも気になることが…

「社さん、足の怪我手当てしよう？
あ、僕なんかが意見なんてしてしまってすみません！」

走った所為か傷が酷くなってるように感じます

だけど、社さんはそんなこと全然気にしていない
寧ろ別の事を考えてるような

ぶっちゃけ不機嫌になったような…

「傷はすぐ治る
俺、妖狐と天狗の血を色濃く受け継いだ半妖だから
30分後には完治するし

それよりも…」

僕をじっと見て拗ねた幼子のように口を尖らせる彼女は先程とは違った苛立ちを浮かべているようだ

訳が分からず小首を傾げれば、彼女はもごもごと口を動かす

「俺、さん付け…嫌なんだけど——
だって、なんか余所余所しいし

つまりえっと――

友達なら、仲間なら、敬語とかさん付けとかは……」

あ、この子は本当に拗ねてたんだ

そして、何が言いたいのかも分かった…

「社、やっぱり傷の手当ぐらいはしよう？
綺麗なブーツが血塗れになっちゃうよ」

少し、少しだけ警戒心を緩め、微笑めば
一瞬呆けた後、新しいおもちゃを見つけた子供のようにキラキラと
大きな瞳を輝かせた

予想以上の反応に、今度は僕だけでなく、当人以外のこの場の全員
が呆けてしまう

けど、それに気付かないのか

「うん！分かった！」

満面の笑みを浮かべ、僕の言葉に大きく頷いた

なんか社、子供に戻ってないかな？
寧ろ、これが本来の彼女なのか？

そうこう考えている間に、彼女は柄杓で傷口を洗い、袖から小さな
小瓶と白に青い桜の模様が入った手拭いを取りだし
傷口に小瓶の中身を塗り、手拭いを裂いて傷口をしっかりと縛った

かなり手慣れている

「出来た！」

治療が終わり、こちらに戻ってきた社はクルリと窓の方を向き、ルーシーちゃんの正面に立った

ルーシーちゃんは何故か社に尊敬の眼差しを送っている

忍者の末裔らしい彼女は陰陽師の社に何かしら憧れの的なものがある
のだろうか？

「自己紹介、してなかったよな
知ってるだろうけど、俺は社！よろしく☆」

『るーたんはルーシーだぴよ
よろしく社たん！』

お互いに笑みを浮かべ、自己紹介する彼女達
今、漸く納得した

彼女達は女の子だ

だって背景にお花畑が見えるもん

『社たん社たん！さっきのお薬はもしかして河童の妙薬?!』

「よく知ってるな！
その通り！近所の河童くんを助けたときに貰ったんだ☆」

『凄いぴよ！』

なんか薬の話で盛り上がってる

けど、河童の妙薬は凄いな
伝説上の薬だし

相撲好きな河童が打ち身や切り傷を治すために作った妙薬

生きてお目にかかれるとは思わなかったよ

「で、鬼退治はどうするんだ？」

困ったように眉根を下げるチョータローさんに社、爆笑

やっぱり基本的なところは変わってない

しかも、社につられてルーシーちゃんもお腹を抱えて笑ってるし…

チョータローさんドン(° ㇿ °)マイ

『ええい！なんだそのなよなよした態度は！
シャキッとしろ！！
女に守られて恥ずかしくないのか！？』

すみません、それは僕にも言えることです…

「やかましい！
俺には何も出来ないんだ！！」

『やらないだけではないのか？！』

「っや、やれるだけやった！
それでも駄目だった！！」

『それでも！』

「俺がまとめて護れば問題ないじゃん」

ヒートUPする二人を止めた社は欠伸びながら事も無げに告げた
さっきまでの子供っぽさが消えている

「アンタ等に助けられたからな
恩返しぐらいさせろ」

目を細め、綺麗に微笑む社

凄く、イケメンだ

そこらの男子よりよっぽど

『社たん格好いいぴょー！！！！』

ルーシーちゃんの歓声が神社内に木霊する

何だろうこの敗北感

チョータローさんとちょーたろーさんと僕の三人は何故かショック
を受けていた

男として負けた気がする……

「さっきの俺、ヤシ口に憑いていた鬼は心の具現化
それが、ちょーちゃんの考察なら間違っていないだろう
だから、最終的に解決するのはちょーちゃんとチョータローさんだ
なら、俺はそれを完遂するため全力でアンタ等を護る

安心しろ、リクもちょーちゃんもチョータローさんもルーシーちゃんも護る

アンタ等に指一本たりとも触れさせはしないさ」

格好いい！！！！

社すっごく格好いい！！

どうしよう、惚れそう！！！！

こんなに格好いい人だったなんて！！！！！！

いやいやいや！
これも演技な可能性も…

そうは見えないけど！！
簡単に信用しちゃ駄目だ！

だけど格好いいよ社！！！！

危うく惚れそうに成りつつも、なんとか平常心を取り戻した
回りを見れば、思考の波から帰ってきたのは僕だけのようだ

「ゴホンッ、それなら心強いよね
戦闘になったら頼ることになるかもしれないけど、無茶はしないで
ね
君が傷付いたら僕らには罪悪感が残るんだから」

いままでの流れで分かったこと
社のようなタイプは自身が傷を負うことにあまり頓着がない

依存するモノを護れば何でもいいのだから

今、僕らは彼女の中で護るモノと認識されている
なら、社が怪我をすれば僕らの心が傷付くと言えは無茶はしない

そう考えての発言だ

「んー、了解
ヤバくなったら逃走に準じるよ」

ほらね？

「取り敢えず、鬼への対策を考えよう
対策なしに立ち向かうのは無謀だ
勇気と無謀は違う」

さあ、解決を目指しましょう

まずは鬼退治だ！

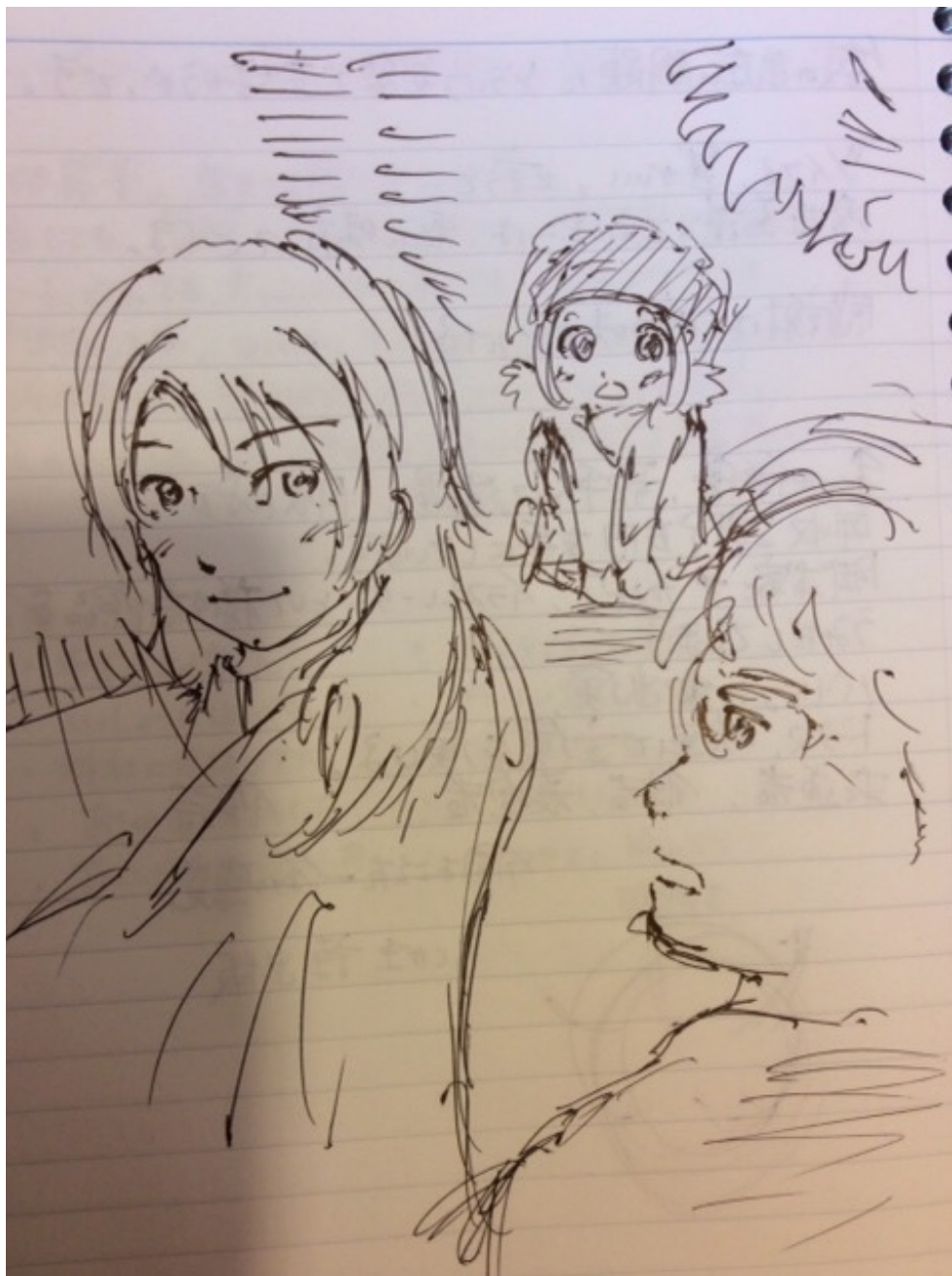
黍団子はないけど仲間はある
信頼も信用も完全には出来ないけど

それでも、退屈しないなら構わない

僕は社と同じ依存体質

僕は、【僕自身】に依存する

〔続く〕



ちょーたろうが、口を開く。

「俺たちは、仲間だ。ヤシロ。」

誰も一人ぼっちで無い…。
だから、安心しろ。

つまりだ、我々は、物質的空間的な接続を超えて、メタレベルの次元で精神的に接続している。そういうことだ。空間的な座標は流動的であるが、精神的な座標は不動なのだ。」

「わっ
わけわかんねえよw

へへっ

へへへへへっ

うっ うっ
うぐっ」

笑いながら、ヤシ口のその赤と碧の両目から、熱いものがこみ上げてくるのであった。

「あれれ？
いま、壁が、消えたみたいだぴょ！」
と虚空を見つめるようにつぶやくルーシー。

「なんだと…。どうということだ？」

あの黒い靄は消え失せ、それがあったところに、さっきの「窓」のもっと大きくなったような光の道ができています。

「少しずつ謎が解けてきたような気がする。」

「はにゃにゃ？」

「俺たちは、それぞれ別の世界にいて、また、別の性格や人格を持っていた。
そして、それは、まるで、水と油のように弾き合う関係だった。
それが、お互いの世界に《壁》を作っていたんだ。

俺は、この窓が見えるまでは、いつも何か物足りないものをずっと抱えていた。
ところが、窓が見えて、貴様らわけのわからんと思っていた奴らが…

全く自分と接点もないと思っていた貴様らが、
実は…
同じ生命体の一部なんじゃないかと、薄々感じているんだ…。

向こうの壁にいる奴らも…。」

「とゆうことわ？
ということわ？」

「俺たちは…いずれ、一つになる、ということだ」

「わんねす————！！
やったぴょ————！！
よくわかんないけどー」



「はにゃっ！！」

「どうした？ルーシー」

「やややヤシロたん」

見ると、ヤシロの身体が薄く透明になりつつあるのがわかる。

「二人とも、ありがとう。
お前たちのおかげで、迷い子だった、《もう一人の俺》と、《俺の
悪魔》はその役目を終えて成仏しそうだ。
俺は、向こうの《俺》に戻るよ」

ヤシロは珍しくきれいで切なそうな笑顔を見せて、向こうへと歩み
始めた。

「行くぜ、社」
「ああ、来な、ヤシロ」
と向こうの社が、にかっとなって手を差し伸べる。

その時、その場にいた誰もが、その光の奥に、
ウサギの耳をつけたような、「神？」のようなものを観た、
ような気がした。

「にいちゃ…………？」

と、消えゆくヤシロは一瞬つぶやいたが、それが誰だかわからな
かった。

（お前とは、もう会えなくなるのか…
バカで、お茶目で、騒ぐのが好きで、そして、その心の奥になにか

哀しさを抱えていた、
お前のことが、
俺は、
す……………

…

んなバカなツツ

とととと消えろ！)

と、ちょーたろうが、心の中で思っているうちに、

そのまま、ヤシロは光の中に消えて行った。

(や、、、ヤシロ。)

向こうの窓で、
「あーやっべwwwクソ笑えたw
自分同士でチューしそうになったし。
まあそれでもいいかw
俺は俺のことが大好きだからな☆」

(クッ！やっぱ向こうから戻ってくんない！！)

「にゅーん！
それではしゅっぱつしんこうっぴょ！！」

「どこにだよ？」

(続く)

ちょーたろーは、社たちが無事に「自分」を取り戻したことに安堵したように、微笑んでいた。
そして、少しひとり、その場から少しばかり遠くに離れた。

彼の心の中にふと虚しさがよぎった。

「俺はッ……

あんな場所にはいけない。

いや、いる資格なんかないんだ。」

ルーシーが、少し気にしたようにこちらを向く。
「ほよよ、ちょーちゃん？」

しかし、すぐに、また何事もなかったかのように、他の人々と語り出し、笑っている。

ちょーたろーは、鳥居の向こうをくぐる。

鬱蒼とした森を出て、古い街並みを眺めながら、切り株に座り、物思いにふけりながらひとり息をふーっと吐く。

(しばらく、俺を一人にしていってくれ。)

彼は、昔からこうやって物思いにふけるのが好きだ、それもひとりの時間と空間をとって。
正確に言えば、彼の普段封印している聴覚を解放させて、宇宙の様々な秩序に満ちた旋律に耳をすませていなければ、彼の魂はバラバラになりそうになるのだ。

(この世界は、あまりにも無秩序と不調和に満ちているッッ…
なぜ、この世に有る人間どもは太陽系の運行の音や、銀河系の鼓動を聞き取る能力がないのだろうか。
そして、それを無視して、自分たちの都合で、自然や地球を破壊し

、それを他の人間に押し付け、その我欲の都合に合わせることでできない人間を「それはダメだ」などと抜かして合法的に罰する。

なぜ、宇宙の法則に逆行するような愚かな真似を続けながら、彼らは平気で笑っていられるのだろうか。

俺には、あらゆる人間どもの感覚が解らぬのだ…)

「人類など、地球にとって見たらガン細胞のようなものだ。善人ほど悪いやつはいない。いち早く、全ての人類は死滅すべきではなかろうかッッ…」そう真剣に考えることが、ちょーたろうには度々あった。

しかし、誰かに話しかけられるたび、ハッと我に返って、何気ない話に応じる。自分の毒舌で他人を積極的に傷つけないし、自分自身も傷つけられたくない。そんな自分自身が嫌で、研究室に引きこもる日々が続いた。

ちょーたろうは、過去を振り返っていた。

彼は決して自分の過去を人に語ろうとしないし、思い出すこともしない。しかし、社が自分自身を解放したことによって、自分自身の中の押さえつけていたものがふつふつと心に湧き上がるのを感じたのだ。



チョータロー・ルードヴィヒ・ヤマダマウンテンフィールドは、18年前、絵に描いたようなエリート志向の両親のもとに生を受ける。ありとあらゆる英才教育を施され、ピアノ、諸外国語、茶、乗馬、武道、学問を叩き込まれる。それらのやらされることは、親の都合でコロコロとかわった。

幼きちょーたろうは、自分自身の「意志」を持つことを許されなかった。

それでも、ちょーたろうは、全てをきっちりこなして、周りの人々から「神童」と称えられ、褒められ、賛美された。彼は、鼻高々だった。

正確に言えば、鼻高々なフリをしていたにすぎない。
心の中では、喜びが感じられず、「周りの人に認められることがすなわち幸せなのだ」と、自分自身に言い聞かせていたに過ぎない。

「僕はッ、僕は特別なんだ。愚民どもとは違うんだ。」
そう思い、何もできない人々を心の中でせせら笑っていた。
当然、心を開ける同年代の友人もいなくなる。

ただ、自分自身の血の滲むような苦勞と努力のみが自分自身を支えるアイデンティティだった。そして、両親と世間の評価、そののみが。

しかし、十四歳を過ぎたあたりから、まんまと行き詰まった。
親の都合でさせられていた習い事の一切に懸命に取り組めなくなった。
机の前に座ると、頭が真っ白になり、身体は重くなる。
しかし、ここで負けては甘えだ、ここで投げ出してもう先はないと自分自身に言い聞かせて、身体に鞭を打ちながらがんばった。

しかし、結果は出ない。
焦れば焦るほど、自分自身が堕ちていくのがわかる。

そんな様子を見た親はちょーたろうにこう言った。
「社会に出たら、こんな苦勞どころじゃないぞ。そんな簡単な勉強ごときで負けてどうする？頑張れ！もっと頑張らないとお前の未来はないぞ。」

思い切って弱音を吐きたかったのだが、
周りの皆は皆揃いも揃って、仮面に張り付いたような笑顔で、
「ちょーたろうくん！頑張ってね！すごいねー！」と言ってくる。

「人の気も知らずにいい気なもんだ。」と思うのだが、その応援を断ると、嫌われ、自分が自分自身でなくなってしまうような気がする。
ので、ちょーたろうは「ありがとうございます」とだけ返す。
しかし、帰って一人きりになった瞬間、全身が倦怠感に包まれるように疼くと同時に、「ヤツ」が現れる。

ちょーたろうの途轍もない聴覚はこれはどうも生まれつきであったと彼自身記憶している。文字も読み始めの三歳ぐらいの時に、日食や月食のタイミングを音でぴったりと当ててしまい、
また、冥王星と海王星の位置が入れ替わるタイミングまで、きっちりと言いついてしまった。

しかし、その能力を認めてくれる者はいなかった。
両親は、何かの偶然かと思って無視してしまったのだった。

幼きちょーたろうは、大人たちの動きというものがことごとく宇宙の秩序に反するというのを、彼らが発する不協和音で察知していた。

ところが、ちょーたろうの頭脳が発達するに従い、彼の頭脳は、「不協和を作り上げることが正しいことなのだ」と思い込み、大人から思い込まされ、徒らに、高慢な態度に突っ走ったのであった。

ある時、再び、15歳のちょーたろうは、おそるおそる宇宙的な聴覚を解放してみた。

三歳の時、彼に聴こえた音が、清らかな清流だとすると、

15歳のちょーたろうに聴こえた音は、もはや…

魚の死体が水面いっぱいになり、それを飲んでいる人々を見るとまるで異形のものどもであった。

不調和なる音が彼の魂に飛び込んできた。

「グゲグゲッ…

つい二気がつかれテしまっタか。気がつかなければ私たチは、おまエを食エた。食エタ。食エた。」

ラジオのチャンネルを切るようにして、ちょーたろうは聴覚を切った。

そして、意を決して伝えたのだった。

「おい、父さん、母さん、そして、みんな…

このまま、いくとヤバイよ。

今、この世界は、宇宙の調和を乱して、恐ろしい化け物が巢食っているんだ！」

「そんなことはどうでもいいんだ。それよりも、お前成績が下がっているじゃないか。そんなこと気にしている暇があったら、頑張れ頑張れ！合格通知を見せるまで私はお前を認めんぞ。」

「お父さんは、あなたのことを思ってあえて厳しいことを言ってくれているのよ。感謝しなきゃ。」

「本当だって！このままでは、、」

「お前こそ、このままだと終わりだぞ？」

「う、ぐっ…。本当なんだってば！このままだと、この世界は汚染された拳句、化け物に乗っ取られてしまう！」

バシッ！

父はちょーたろうを叩いて「もういい！お前は狂っている。なぜ、親の言うことが素直に聴けないんだ？お前はおかしい。周りの奴らも実はこっそりお前のことをおかしいやつだと言っていた。少し、病院に連れていこう。来い！」

「は…はああ？俺がおかしいと言うなら、お前たちの何かが狂っている。いや、この世の中全てが狂っているんだ。俺は知っている！」

だとして、この俺自身はどうだ？人を蹴落とし、孤独になり…ああ、やはり狂っているッッ！

狂っているッッ！
全てが狂っているッッ！

しかし、誰も彼も、自分たちが狂っているということに気がつかないで、自分自身がマトモだと思って、他人を断罪している。

しかしッッ
それは、俺自身もなのだ。

ニンゲンは…どうしようもない存在だ。
みんな死ね。死ねばいい。

もはや、あの宇宙の調和に戻るなどできない、二度と、二度とな。」

そう自分にいきかせるやいなや、ちょーたろうは、家を飛び出し、住んでいた街から電車で一万マイル離れたところまで、手持ちの電車賃がなくなるまで離れた。

帰る金もない。食費もない。行き着いたところで、そのまま死ぬつもりだった。救いようのない世界を呪って。自分自身も呪って。

駅のそばの無人の小屋の干し草の上から見る月を見ながら、「これで身よりもなくなり、天涯孤独の身だ。あとは、飢えて死ぬだけだ。これでよかった、良かったんだ。」と言い聞かせたが、じきに、周りに誰一人のいない真っ暗闇のなかで恐ろしいほどの孤独と死の恐怖に襲われた。

全身から冷や汗が滴り落ち、戻ることもできないし、行くこともできない。

暗闇の中で聴覚をオンにすると、もう、あの化け物は現れてこない。静かだ。あまりにも静かだ。

星空と銀河の運行の「わーーーーーッ」(便宜上)という音だけが虚しく響く。百光年離れたところで、星が寿命を終えて燃え尽きて、そこにあった惑星も飲み込んでしまう音がこの場所でははっきり聞こえる。その惑星では、(その太陽系で言う)一千万年ほどにわたり知的生命体が出て、三千の文明が起こり、そして消えて行ったが、その生命体は星の消滅を察知して遠く移住して、星は廃墟になったという。

「調和とは…それでも虚しいものなのだな。果たしてこの星はどんな運命を辿ることやら。ま、人類が滅んでしまおうが、理想郷ができようが…いずれ太陽に飲まれ跡形もなく消えてしまうことには変わりはないのだがな。

俺はこのまま、世の中を捨てて、宇宙に戻ろう。」

そのまま、グースカ寝てしまった。

翌朝、偶然通りかかった、ストロベリーマウンテン校の生徒に声を掛けられた。

「あ…あのう、大丈夫ですか？」

少女のようなひ弱な内向的な少年で、少し長髪で…。

(ちょーたろうは、ふとそれがリクだったような気がした。)

「…ううーん。何だ貴様はッ。貴様も宇宙を穢す愚民のひとりかッ？」

「…そ そういうことはよくわからないんですけど、、
あ、あ、あのー
家とかがなくて、食べ物とかなくて、あ、
えっと、困っているようでしたら、
うちの学校、
その、ね？
お兄さん、頭良さそうだし、お手伝い？あ、はい、
えっと、それで
あのー」

「じれったいッ！やはり愚民かッ？
結論から言えッ！」

「はい！あの、うちの大学の研究室、住み込みで来ませんか？」

「…

俺は、ここで、死…

(のうとおもっていたところだが、まあいいか。
暇つぶしにもってこいだ。研究とやらは。
人生の全ては所詮暇つぶしなのだから。)

よし、そこまで言うなら参ろう。」

そうやってちょーたろうは見ず知らずの他人にホイホイついて行き

、
大学教授の元で講義を受け、助手として研究を重ね、
持ち前の才能で、17歳にして、博士となってしまった。
両親から無理やりやらされる勉強とは違い、研究所での学問は何遍
徹夜をしても疲れなほど熱中できるものであり、彼は、もはや自
分が家出をしてきてきたことすらも忘れていた。学問や研究はニン
ゲンと違って、正直で嘘をつかない。
しかし、彼自身の心の奥にある、ニンゲンという種族に対する虚し
さや蔑視は決して癒されることはなかった。



フッ
俺らしくもねえ。
嫌なものを思い出してしまったぜ。

ああ、そうだ、俺には孤独が似合っている。
人と関わっても、傷つき、傷つけられるだけだ。

人間なんてものは所詮分かり合えぬ生き物なのさ。

と言いながら、ちょーたろうはひとり踵を裏返して再びもといた場所に戻ろうとした、のだが、、、！！！！

(続く)

綺麗な色

溢れ出る色彩

俺、白雪社の目には圧倒的な視野や異形のモノを映す以外に
対象人物から溢れる色が見えた

それを、思い出した

お兄ちゃんを失ったことで押し込めていた才能
何が出来るか分からないモノだけど

銀ラメの入った浅葱色と空色の入り交じったお兄ちゃんの色が、俺
は大好きだった

そんな俺には、ここに居るもの達の色も見える

白銀のラメが入った無色透明の俺に

明るく活発な赤とオレンジのルーちゃん

金ラメの入った赤紫色のリク

そして

黒に侵食去れつつある深翠色のちょーちゃん

黒は災いの色

ちょっとヤバイかもな

俺とは正反対な黒
黒は破壊
白は調和を意味する

陰陽師はより、自然に近ければ近いほど力を発する

妖は、【自然】と【人の心】から産まれる

俺は半分人間だけど、異端で自然に近い
だからこそ、俺は強い

五行を操るには無欲であることが大前提
俺の欲は、【お兄ちゃんに会いたい】という願いと
【お兄ちゃんのお願いを遂行する為の生存欲】のみ

家も、平安時代から続くもので
何度も建て直しているが、ガス電気は無く
薪や蠟燭で料理や灯りを取っていた

つまり、現代社会から切り離された世界で暮らしてきたのだ

その為、都会の濁った空気が合わず何度か仕事に支障が出た事もある

全くもって妖には住み辛い世の中だ…

と、そんな生活をしてきたため
社の色は澄みきった水に、降りだした雪が反射した調和の色

本来なら鬼に憑かれる筈はないのだが
お兄ちゃんへの行き過ぎた愛情が狂わせていた

今も変わらぬ愛情をお兄ちゃんに注ぎ続けているけど
バランスの取り方を覚えた俺は安定している

ルーちゃんやリクと話ながらちょーちゃんを観察していると、黒が侵食していき、元の色が消え掛かっている

流石に、不味い
俺の二の舞になるのが目に見える

俺は話を切り上げて、窓を越え、ちょーに歩み寄った

歩み寄ったと言っても、半妖ではなく、妖としてなので
見鬼の才のあるものしか見えも聞こえもしないけど～

真後ろまで来ても気付かないとか、鈍すぎるのではないだろうか？

ここは一つ驚かせて黒の侵食を抑えてやろう！

意地の悪い笑みを浮かべて、苛立っている背中に飛び付き半妖に戻る

「ちょーちゃん！何物思いに耽ってんの～
老けて見えるぜ18才ww」

別に耽ると老けるを掛けた訳じゃない
たまたまだ

「な、ななな何をする！！？」

俺に全く気付かなかった為
突然の事態に暴れだすちょーちゃんを抑え込みケラケラと笑って話す

「いや～哀愁漂ってたから悪戯するしかないかなって☆
悪☆戯☆成☆功！！」

ルンルンと笑えば呆れたような溜め息の後、案の定質問攻めにあう

「何故、足音がしなかった？
何故、気配がない？
何故、悪戯に思考が向く？
何故、圧迫感はあるのに体重を感じない？
何故、抱き付いたりする？」

計五つですか多いですね～

「俺が、妖で悪戯が好きだから☆」

だが、一言で済む質問だww

妖狐と天狗の血が強いので人間より妖に近いから体重が殆ど無いんだよね～

「妖？」

「おう、人間より妖に近いよ
外見以外は殆ど妖だし」

「つまり人間ではないと？」

「半妖だってさっきも言ったよ？」

ふむ、と悩んだ後

「人間でないのなら抱き付くのを許可してやる！
感謝しろ！」

相っ変わらず上から目線だなー

けど、黒の侵食が止まったしいいか

「了解であります☆」

元気に答えれば満足そうに笑うちょーちゃん

この人、人間嫌いかwww

「さ、そろそろ作戦会議しようぜ？
人間嫌いのちょーたろーくん」

ニヤリと告げれば
嫌そうに顔を顰められたが怒られなかったのでよしとする

「いいだろう

して、貴様はいつまで俺の背中にぶら下がっているつもりだ？」

立ち上がったちょーちゃんの方が10cm以上背が高いので足が地面に着かず、ぶらぶらと揺れる

「走り回ったから疲れた
歩くの面倒臭い」

素直な感想を言えば、おんぶしてもらえた
やったね☆

窓の前まで来たら、下ろしてもらい
今度はリクに抱き付く

気に入った者に抱き付くのが好きなので我慢してもらおう、そうしよう

警戒心の強いリクは少し、身を硬くするけど敵意がないことが分かれば、幾分か力を抜く

頭の良い奴

「さーてっと！
これから作戦会議を始めるぜ☆
議題はチョータローさんの妹を狙ってる鬼をどうするかだ！
意見のある人はどんどん言ってくれ☆」

明るく言い放ち
作戦会議が始まった

「さーてっと！
これから作戦会議を始めるぜ☆
議題はチョータローさんの妹を狙ってる鬼をどうするかだ！
意見のある人はどんどん言ってくれ☆」

と、社。

「俺の妹が狙われてる、だとっ？
俺に、妹なんぞいなかったはずだが……。」
ちよーたろー。

「はにゃー？どゆことぴょ？」

「おっつと…失言」
社には、人から溢れ出す色、すなわちオーラのようなものを認識できたのだが、
ちよーたろーの妹のようなものがあるとそう思えたのだ。

「すまん。なぜか知らぬが、今、俺は疲れている。
貴様らと関わりたくない。一人にしておいてくれないか。」
とちよーたろー。

それまで、裏方であまり喋らなかつたリクがちよーたろーに歩み寄る。

「あ、わかります。
だって、ちよーたろーさん、ずっと戦ったり、移動したりで大変でしたものね。」

空気を敏感に察し人を癒すことのできるリクの言葉が、ちよーたろーの心にはなぜか優しく響いた。

社は、リクの身体から、周囲を取り囲む森とリク自身が調和して、緑色の癒しの色が広がっていくのを見た。

普段はおどおどして、後ろについてきて目立たない彼だが、こんなことができたなんて。

孤独と欺瞞の世界の中で生きてきたちよーたろーがずっと忘れていた、

大自然と一体となる感覚だった。

「ちょーたろうさん、ほんの少し、眠ってもらいます。」
と、リクが微笑みながら話しかける。

「はたからきいてりゃ悪人だな笑」と社。
しーっと、それをなだめるリク。

「あなたには、今眠ることが必要なのです。
あなたの意識を後ろから押さえつけている、鬼がいます。
その鬼は、人質を取っています。
あなたの妹を。
あなたがあがけば足掻くほど鬼はあなたの妹を縛り付け、あなたが
自由に力を発揮することを押さえつけているのです。」

「ふっ…お前の言うこと、信じられる気がする。
では、お前に全てを信じて託す。」

コクンと頷くリク。

リクが手を広げ、空を切り、気を練り出すと、
周りにあった木木が樹木と葉を広げ、ちょーたろーの周りを取り
囲み、ベッドをつくる。そこに、ちょーたろーは寝そべり、なすが
ままに任せる。

緑色のオーラが、身体を取り囲む。

リクが横目で、ルーシーを見ながら合図する。

「るうたん、いいかな？
ちょーさんの、そばに飛び込んでください。」

「ほよよー？」

「ちょーたろうさんとるうたん、あなたには、深いところで繋がりが
感じられるんです。」とリク。

「ああ、それは俺も薄々感じていた。似ても似つかぬ性格だけど
な☆」と社。

「さあっ！行ってやれ！るうたん！
秘密を暴くのだ☆」

「ほよよー！ワクワクー！
じゃーんぱ。」

ルーシーはちょーたろーの世界へ飛び込んで行った。
緑のもやのようになったオーラの向こうへ。

(続く)

「なあ、リク
アタこんなこと出来たんだな」

青と赤の目を柔らかく細めた社は、眠るちょーたろーに自身の羽織
を掛けてやりながら
隣に立つ蜂蜜色の髪と琥珀色の瞳を持つ少年に話しかけた

「なぜか、分からないけど
気が付いたら出来てたんだ」

困惑した様子の少年、リクは弱々しく告げる

「凄いな、俺は戦闘以外は役に立たねえし
そりゃ、今まで戦場にも行ったことあるから救命士としての腕も実
績もある
けど、心を癒すことは出来ない
だからリクは凄いな」

ふんわり微笑んだ社は優しくリクの頭を撫でた
さらさらした髪が揺れ、ぴょこんと跳ねたナンタケット島のような
アホ毛が驚いたようにピンと立つ

それを見て面白そうにケラケラ笑う社に少しムツとしたが、リクは
咳払いをしてちょーたろーに向き直る

「別に、出来ることをしただけだよ
僕はそれしか出来ないから」

社に対してはオドオドしなくなったリクは、ツンと突き放したよ
うな、照れたように、少し寂しそうに話す

そんなリクの変化に気付きつつも特に気にすること無く頭を撫で続
けた

ちょーたろーの黒色と深翠色と、リクの慈悲の緑色

そして、ルーシーの赤色とオレンジ色を自慢の眼で眺める社は無力感を感じ、気温の下がり始めた神社を見回し

気付いた

「鬼が降りてくる」

小さく、囁くような声で呟いた社は、より多くの情報を得るため、ピンと立てた狐耳で辺りを探る

ちょーたろ一程ではないが狐並なら聞こえるように

遠くでガサガサと不規則に草の揺れる音がする

駄目だ、まだまだ遠すぎて距離も場所も特定できない

視界の端に影が映る程度でまだ何kmも先だ

トラップを上手く避けているようで、一つたりとも発動しない

それらの事に苛立ちを感じつつ、社は神社の内側に結界を張った

ルーシーは未だ帰ってこず、悪戯に時が過ぎる



少し、様子を見た方が良さそうだな

「リク、俺は山の様子を見てくるよ」

一声掛けて、俺は神社内で一番高い木に登った…というか飛んだ

俺の天狗の羽は赤ちゃん並
つまり飛べない

なので身軽な身体を利用して、枝を踏み台に飛ぶのだ

「よ、っと」

一番高い木の上はやはり見晴らしが良い

闇夜に紛れる黒い中華服と反対色の白銀の髪が少し鬱陶しいが…

散々暴れ回り乱れた髪を解き、背中の中まで伸びた髪が風に浚われる

仄かな桜の香りは洗髪料のモノだ

あぁー、妖になると髪が伸びるから面倒臭い
フルパワーだと腰まで……いや、腰より長くなるからなあ

はぁー……

桜という自身の好きな香りを感じつつ、やるべき事に集中しよう

遠目に見える山の中
ひときは輝く大木

先程まで俺がいた場所

あそこで誰かに会った気がするけど分かんねえ

さわさわと流れる風を感じながら鬼を探す

山の中腹で何かが動いた

「みいつけた★」

真っ赤な鬼が山の中を這いずり回ってる

結界に阻まれては移動して
トラップは踏まずに、少しずつ
けど確実に近付いてきている

面倒臭いな～

念のため、もう一枚結界を張り、俺はリク達の元へ飛び降りた



身軽な少女が戻ってきた

つまらなそうな顔をして

というかその狐耳はどうした！？！？

「どうだった？」

平静を保ちつつ彼女に声を掛ければ、苛立った様子で簡潔に言葉を発する

「トラップを全部踏まずに、着実にこっちに向かっている」

見えたんだ…
凄い目だな

彼女の最大の特徴である目はかなり便利だ

月明かりだけが頼りの夜暗の中、遠く離れた山の中を這いずり回る鬼を探し出し、観察出来る

この目がある限り僕らの優位は揺るがないだろう

それに比べて僕は気配を探るという曖昧さだけだ

何とかもっと性能を上げて、生存確率を上げないと

死にたくないし

自分本意の考えだけど
これが僕なんだから仕方ない

僕は自分が一番大事だから自己犠牲は絶対に考えない

自分がいる限りいくらでも変えられる
自身も、周囲も

だから僕は死なない
死にたくない

他人に情けを掛けない訳じゃない
ただ、天秤に掛ければ自分の方に傾くというだけなのだ

「結界を強化したからしばらく持つよ

二人には破られるまでに戻って来て欲しいな」

苦笑混じりに告げる彼女は僕と似てるけど正反対だから嫌悪感を抱かずにはられない

利用するという名目の元、僕は彼女と一緒にいる
そう考えれば少しは耐えられるからまだマシかな？

「リク、君ぶっちゃけ俺の事すげえ嫌いだろ」

ニシシと悪戯気に笑う社の言葉に身体が硬直する

バレてる？

「いいよ嫌いで、暫くの間俺を利用すればいいさ
俺は気ままに過ごすし」

笑顔で乱暴に僕の頭を撫でた彼女は僕の返答を待たずに再び木の上へ飛んだ

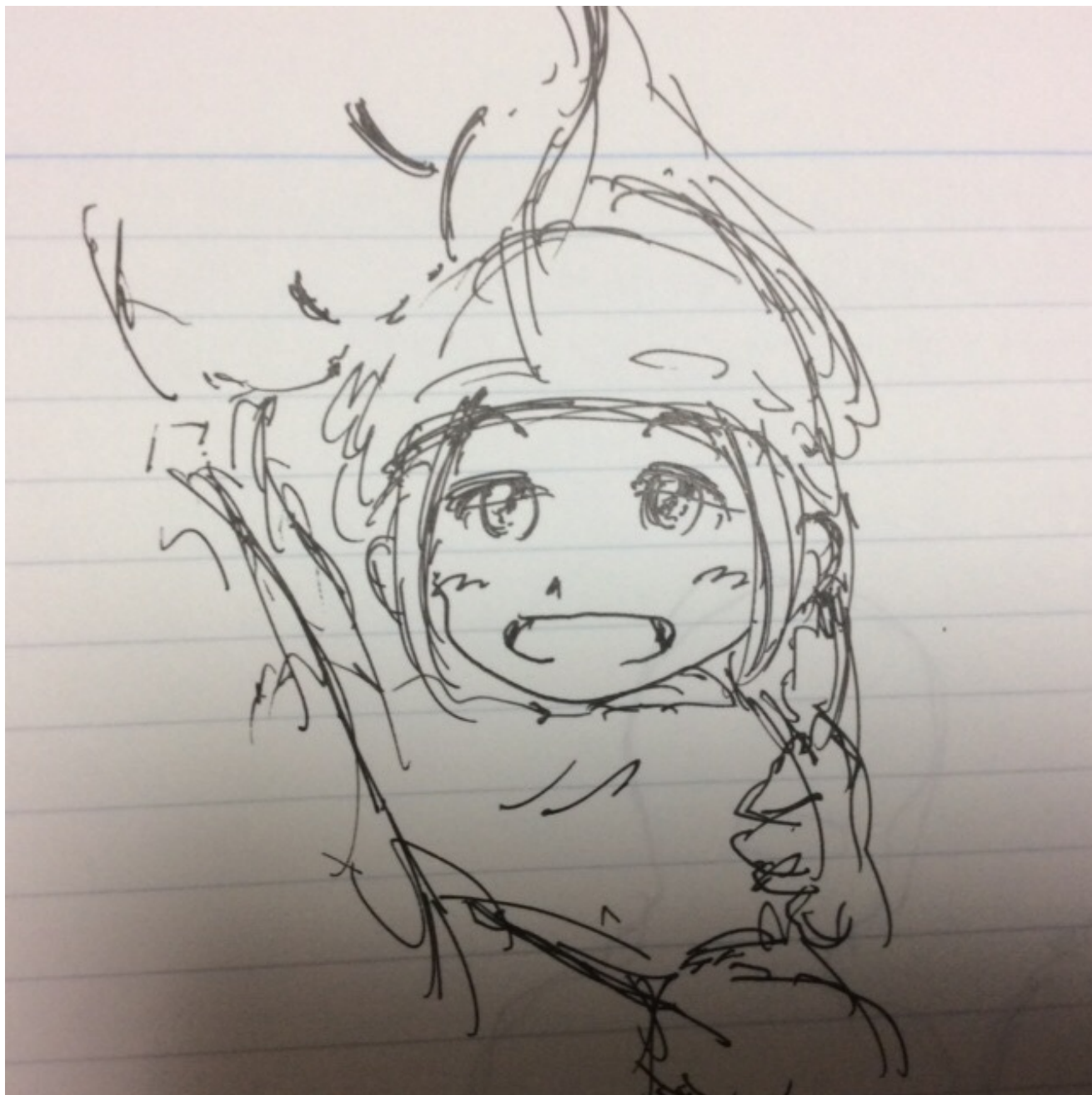
軽やかなステップとジャンプで30秒も掛けず頂上へ登ってしまう

油断ならない
彼女には気を付けないと…
弱気でなんかいられない

下手すれば

此方が食べられてしまいそうだ

〔続く〕





ちょ

一たろうの世界に飛び込んだルーシー。

「ぬぬぬーん。

ここわここわ？」

もやもやの雲のようなオーラの中を手探りで進んで行くと、別世界に来たようだ。

星空

孤独

理科の実験室

豪華な家

ピアノ

厳格そうな大人たち

笑顔一つ見せない子ども

おもちゃ

様々なイメージがるうたんのまえを通り過ぎていく。
まるで、立体の映画のように。

「ものは素敵だけども、
この子は、なんだか哀しそうかわいそうなかんじがするぴよ」

そして

ウサギの耳をしたあのこがぼんやりとルーシーの目に映る。

「はにゃーん。
きみは、誰だっけ。
うん、たしかにるうたんは知ってるっぴよ。きみのこと。」

ウサギのあのこが何を言ったかはるうたんははっきりと覚えていない。
でも、るうたんは、あの男の子を助けてあげなくちゃとおもったんぴよ。

公園で一人ぼっちでブランコを漕いでいるあのおとこのこは、そうだ、
メガネもかけてないしツンツンヘアでもない、
しかしわかるるるっぴよ。
ちょーたん！ちょーたんぴよ！
かかわいいぴよ。幼きちょーたん！はにゃはにゃふわーっ。

るうたんはねーっもう、うわーってなって、どーんってなって、
んで、じーんてなったんぴよ

(…一人称によるナレーションが意味不明につき、るうたんナレーションは少し控えさせていただきます。)

ルーシーは、公園に佇み空を一人で悲しそうにみる幼きちょーたろうを見て、
きゅんと、こず、

つい、突き飛ばしてしまった。

「ぶわっ！」

「やぽー！ちょーたん、いえーい。げんきい？」

と、同時にルーシーの頭の中に珍しくこんな予想が浮かんだ。

(にや…にやつ……

どうせ、あの頭の硬いに一たんのことだから、きっと、

「貴様ツツ！いきなり何をするか！この無礼者！

蝉でもそんなことはせん！失礼だぞ！」とかいってるうたんのことを罵倒しそうな予感なのぴよ！)

と思いきや、

「わっ…わっ…びっくりしたあ。あ…あ…邪魔だったね。ごめんね

。ちょーたろうです、うん。」

ルーシーは一瞬フリーズした。

「超！がつくほど、いい子ちゃんぴよ————ん！

しかも、逆にあらまやれるなんてえ」

(注:「あらまやれる」はるうたん語で謝られる)

そうか、この哀しい目をしたいい子ちゃんが、あのクソ毒舌ヤローになっちまったんだんだぴよか。

「ううう…ちょ、ちょーたん！」

とって、ルーシーは幼いちょーたろうに駆け寄ってぎゅっと抱きしめた。

「ななな…どうしたの。」

「…

ちょーたん！

あのね！

辛いことがあっても、この温もりを忘れるんじゃないぴよ！

るうたんはいつもじゃないけれどそばにいてあげるぴよ！
いつもじゃないというか多分一瞬くらいだけでもおぬしをぎゅーして差し上げるのんのん！」

ちょーたんが、るうたんをぎゅっかえしてくれたこと、たしかにわかったぴよ……………。

桜の花びらが一面にふぶき、
その場所の全てが消えて行くようだった。



俺、ちょーたろうも、また、もやのようなオーラの中を手探りで歩いていた。

「俺は、今どこにいるんだ。
なぜ、こんなところを歩いているんだろう。
何があったか思い出せない。」

川の流れのように、いろんな風景が浮かんでは消え浮かんでは消えていく。

西洋の何処かの街の緑の広がる郊外の家。

かける犬

オンボロの車

笑い声

ベッドとソファ

子どもを抱き、慈しみの顔をしている女性

そばで微笑みながら見ている夫

抱かれながら、何も不安もないように思う存分甘える金髪の女の子

「…ああ、こいつは、ルーシーの幼い頃か。」

春の日差しの中、時間が止まったように、母親と小さな娘の暖かいひと時を、俺はずっと見入ってた。

俺は自分が、ちょーたろうであることを忘れていた。

気がつくと、「僕」は、「単なる男の子」になっていたと思う。

きっと、服は、
ああ、そうだ、昔着ていた子供ようにしたてられた古着だ。

少し遠くで、僕は、ルーシーが母親に甘えるように抱かれている様子
をずっと見ていた。
僕は気がつくと指をくわえたり、涙を流したりしていた。

母親もルーシーも、僕の存在に気がつくことがない。

少しずつ、僕は、母親…ママのところに近づいていったんだ。

ママは僕に気がついて、微笑みかける。
それが、僕には、この世で一番嬉しくて幸せなことに思われた。

でも、ママはルーシーを抱えているから…僕は……。

ママに触れることさえ出来ないんだ。

そう思った時、
春だと思っていたその場所に、吹雪が吹き荒れて、ママとルーシー
は凍りついてしまった。

僕は、自分自身のことを思い出した。

僕は、僕ではいけない。

俺は…何とか、しなきゃいけない。

「ちっきしょう！」

吹雪に吹き飛ばされそうになりながら、俺はスコップや機械を片手に、雪を掻き分け進んだが、いつの間にか、母親の姿もあの家も姿を跡形もなく消してしまっていた。

その時、鬼が翼を広げて、「お前の家族は、さらっていくぞ」と高笑いをしながら、凍った二人をはるか空中に持ち去って行くのが見えた。

俺は、思いっきり叫んでいた。何もできず。

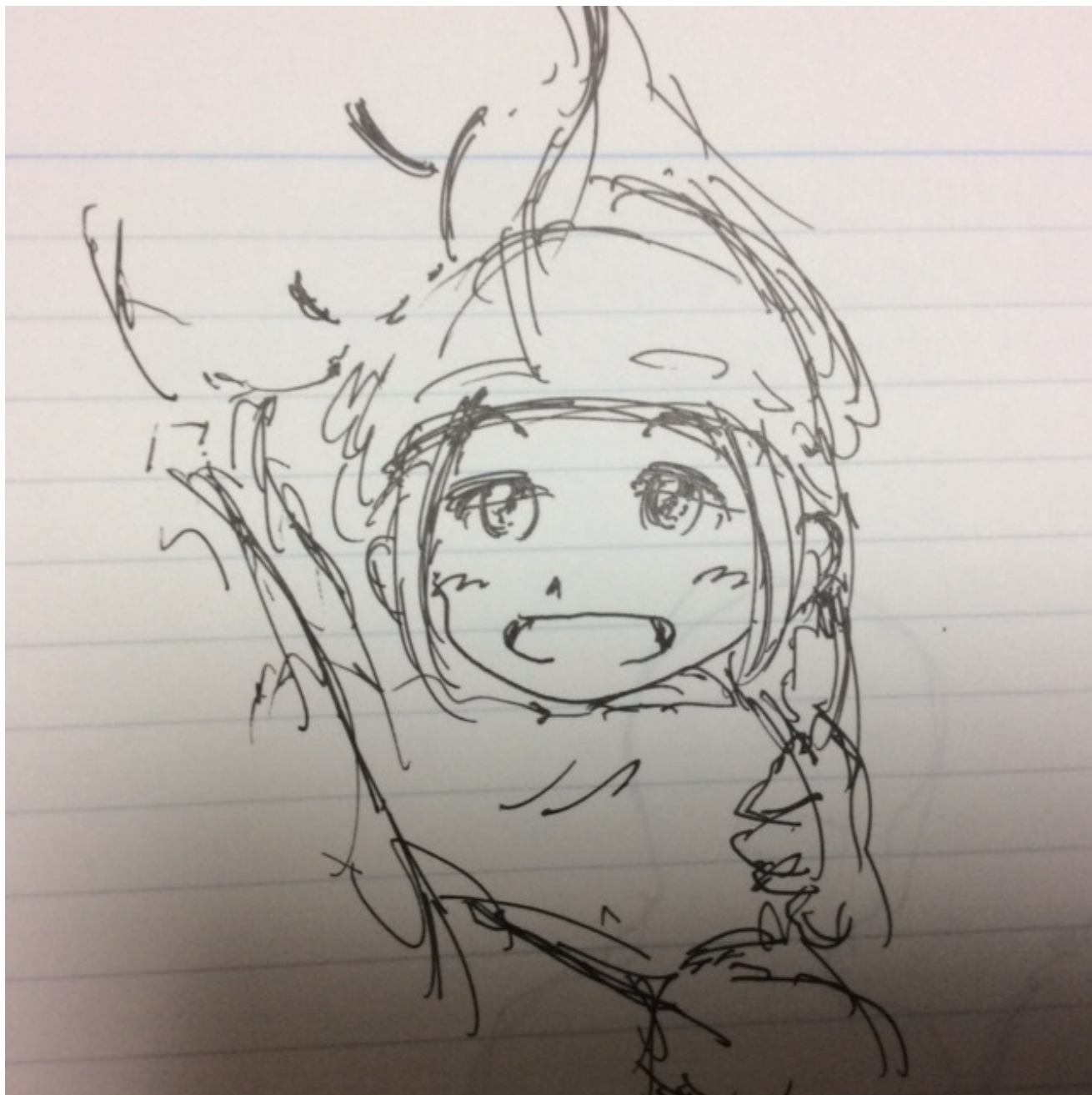


あのもやは夢だったのか、幻影だったのかわからないが、気がついたら消えていた。

そして、今まで見たことのない西洋の庭園に、ルーシーと、ちょーたろうは倒れていた。

(続く)

第二十三話 illusion





ちょ

一たろうの世界に飛び込んだルーシー。

「ぬぬぬーん。

ここわここわ？」

もやもやの雲のようなオーラの中を手探りで進んで行くと、別世界に来たようだ。

星空

孤独

理科の実験室

豪華な家

ピアノ

厳格そうな大人たち

笑顔一つ見せない子ども

おもちゃ

様々なイメージがるうたんのまえを通り過ぎていく。
まるで、立体の映画のように。

「ものは素敵だけども、
この子は、なんだか哀しそうかわいそうなかんじがするぴよ」

そして

ウサギの耳をしたあのこがぼんやりとルーシーの目に映る。

「はにゃーん。
きみは、誰だっけ。
うん、たしかにるうたんは知ってるっぴよ。きみのこと。」

ウサギのあのこが何を言ったかはるうたんははっきりと覚えていない。
でも、るうたんは、あの男の子を助けてあげなくちゃとおもったんぴよ。

公園で一人ぼっちでブランコを漕いでいるあのおとこのこは、そうだ、
メガネもかけてないしツンツンヘアでもない、
しかしわかるるるっぴよ。
ちょーたん！ちょーたんぴよ！
かかわいいぴよ。幼きちょーたん！はにゃはにゃふわーっ。

るうたんはねーっもう、うわーってなって、どーんってなって、
んで、じーんてなったんぴよ

(…一人称によるナレーションが意味不明につき、るうたんナレーションは少し控えさせていただきます。)

ルーシーは、公園に佇み空を一人で悲しそうにみる幼きちょーたろうを見て、
きゅんと、こず、

つい、突き飛ばしてしまった。

「ぶわっ！」

「やぽー！ちょーたん、いえーい。げんきい？」

と、同時にルーシーの頭の中に珍しくこんな予想が浮かんだ。

(にや…にやつ……

どうせ、あの頭の硬いに一たんのことだから、きっと、

「貴様ツツ！いきなり何をするか！この無礼者！

蝉でもそんなことはせん！失礼だぞ！」とかいってるうたんのことを罵倒しそうな予感なのぴよ！)

と思いきや、

「わっ…わっ…びっくりしたあ。あ…あ…邪魔だったね。ごめんね

。ちょーたろうです、うん。」

ルーシーは一瞬フリーズした。

「超！がつくほど、いい子ちゃんぴよ————ん！

しかも、逆にあらまやれるなんてえ」

(注:「あらまやれる」はるうたん語で謝られる)

そうか、この哀しい目をしたいい子ちゃんが、あのクソ毒舌ヤローになっちまったんだんだぴよか。

「ううう…ちょ、ちょーたん！」

とって、ルーシーは幼いちょーたろうに駆け寄ってぎゅっと抱きしめた。

「ななな…どうしたの。」

「…

ちょーたん！

あのね！

辛いことがあっても、この温もりを忘れるんじゃないぴよ！

るうたんはいつもじゃないけれどそばにいてあげるぴよ！
いつもじゃないというか多分一瞬くらいだけでもおぬしをぎゅーして差し上げるのんのん！」

ちょーたんが、るうたんをぎゅっかえしてくれたこと、たしかにわかったぴよ……………。

桜の花びらが一面にふぶき、
その場所の全てが消えて行くようだった。



俺、ちょーたろうも、また、もやのようなオーラの中を手探りで歩いていた。

「俺は、今どこにいるんだ。
なぜ、こんなところを歩いているんだろう。
何があったか思い出せない。」

川の流れのように、いろんな風景が浮かんでは消え浮かんでは消えていく。

西洋の何処かの街の緑の広がる郊外の家。

かける犬

オンボロの車

笑い声

ベッドとソファ

子どもを抱き、慈しみの顔をしている女性

そばで微笑みながら見ている夫

抱かれながら、何も不安もないように思う存分甘える金髪の女の子

「…ああ、こいつは、ルーシーの幼い頃か。」

春の日差しの中、時間が止まったように、母親と小さな娘の暖かいひと時を、俺はずっと見入ってた。

俺は自分が、ちょーたろうであることを忘れていた。

気がつくと、「僕」は、「単なる男の子」になっていたと思う。

きっと、服は、
ああ、そうだ、昔着ていた子供ようにしたてられた古着だ。

少し遠くで、僕は、ルーシーが母親に甘えるように抱かれている様子
をずっと見ていた。
僕は気がつくと指をくわえたり、涙を流したりしていた。

母親もルーシーも、僕の存在に気がつくことがない。

少しずつ、僕は、母親…ママのところに近づいていったんだ。

ママは僕に気がついて、微笑みかける。
それが、僕には、この世で一番嬉しくて幸せなことに思われた。

でも、ママはルーシーを抱えているから…僕は……。

ママに触れることさえ出来ないんだ。

そう思った時、
春だと思っていたその場所に、吹雪が吹き荒れて、ママとルーシー
は凍りついてしまった。

僕は、自分自身のことを思い出した。

僕は、僕ではいけない。

俺は…何とか、しなきゃいけない。

「ちっきしょう！」

吹雪に吹き飛ばされそうになりながら、俺はスコップや機械を片手に、雪を掻き分け進んだが、いつの間にか、母親の姿もあの家も姿を跡形もなく消してしまっていた。

その時、鬼が翼を広げて、「お前の家族は、さらっていくぞ」と高笑いをしながら、凍った二人をはるか空中に持ち去って行くのが見えた。

俺は、思いっきり叫んでいた。何もできず。



あのもやは夢だったのか、幻影だったのかわからないが、気がついたら消えていた。

そして、今まで見たことのない西洋の庭園に、ルーシーと、ちょーたろうは倒れていた。

(続く)

「そういえば、チョータローさんの妹さんはどんな子なんですか？」

隣に立つ彼に訊ねれば、一瞬驚いた表情の後
とても楽しそうにほほを緩めた

「とてもお転婆な子だよ、俺とは全然似てない
正反対と言ってもいいくらいさ」

そう言う彼の視線の先にはルーちゃん
なるほど、彼女が妹さんなんだ

「それって」

「ああ、君達の言うパラレルワールドの彼女が俺の妹だ」

やっぱりそうなんだ

慈しむようなチョータローさんの視線から妹へ向けられる感情が見
受けられる

余程大切なんだろうな…

「リク君は兄弟とかは？」

「いえ、僕は一人っ子なもので」

「そうか、その方が気楽も知れないね
兄弟が居ると面倒なことも多いから」

それでも楽しそうなチョータローさん

一人っ子の僕には分からないな……

「そういえば社も兄が居ると言っていたな」

「そうですね」

「随分と溺愛していたみたいだが…」

溺愛というか
最早執着、依存だろう
アレは…

「亡くしてしまったから余計にといったところでしょうか？
あ、生意気に意見なんか言ってスイマセン！！」

「いや、気にするな」

「はい、スイマセン！！」

「(汗)」

似たような問答を暫く続けていると

バチンッ！！

何かに弾かれるような凄まじい音が神社内に響き渡り、僕らの鼓膜を震わす

バシッ ビシッ バチンッ

更に続く破裂音

「な、何事だ！？」

「弾くような破裂音、弾く……
まさか！！？」

僕の言葉の直後、大きな地響きと共に地面が激しく揺れる

踏ん張ってみるも、すぐにバランスを崩し
二人して石畳に這いつくばる事となった

「うぐう…」

強か打ち付けた腕が痛い

涙が目に浮かび、視界が揺れる

揺れ、滲む視界の先には大きな朱い鳥居

そして、巨大な赤黒い

鬼

なんであれがこんなところに！？

社が食い止めてるんじゃ……

「ぐあゝ ああああああ！？！」

今度は何？！！

隣から聞こえた呻き声

その発信源はチョータローさんで
苦しそうに胸を抑え、暴れている

一体何が起きてるの？！

「やられた！」

背後に降り立つ気配と焦った社の声が響く

「社！これはどう、い…う……」

怒鳴り付けようと振り返れば、片目を手で覆った社がフラフラとよろめきながらも立っていた

彼女の手からは血が伝い、指の隙間から止めどなく流れている

社の目に何が？！

憂いを称えた青い瞳が潤み、暗闇の所為か燻んで見える

「社、どう「ちょっと黙って、気が散る！！」

そう言って覚束ない足取りで進む社
赤い液体が石畳を汚してく

あれ？

衝撃音が弱まった??

鳥居を見やれば、今だ鳥居に張り付き何かを叩き続ける鬼の姿
だけど、先程より叩き付ける音が遠い

振り返って社を見れば響く音と連動するように目に見えて消耗して
いる

結界の影響？
だとすれば音も社の疲労も納得できる

では、何故社は怪我を負っている？

木の枝で引っ搔いた……という訳でも無さそうだし
考えられるのは鬼からの襲撃

しかし、結界が張ってあるにも関わらず社に傷を負わせられるもの
なのか？

そしてチョータローさんの苦しみ様
何が起こってるんだよ？！

分からない、どうすればいい？
どうするのが最善策？

僕は……

「まったくもう！仕方ないのお～」

！？

だれ??!

幼さの残る少年の声が響き、場所が特定できない

「え、うそ!?まさか!!!?」

社の焦りと期待の籠った声が鼓膜を揺らす
社の知り合いか?

「ここで死なれては困るのだ、主らには先に進みやって貰わねばならぬのだからな」

少し楽しそうな声
この声、どこかで……

「これは、本来であれば許されぬこと
いつでも助けてもらえとは思わぬ事だな
頑はない子供たちよ」

ぶわりと後方から風が吹き、桜の香りが鼻腔を擦る

強い風が身体を打ち付け、まともに立てない

腕で顔を庇いつつ、社より後ろに立つ少年を薄目でぼやけた視界
の中、何とか確認しようともがく

白と浅葱色の服、長いウサ耳帽子に金髪

あれは、さっきの!!

「お、にい……ちゃん?」

社の掠れた問い掛けの直後、先程とは比較にならない強風が神内を
吹き荒れ目を開けること、立つ事すらままならず

再び瞼を開く頃には少年は跡形もなく消え去り

鳥居から向こうには深い霧が立ち込め、浅葱色に光る魔方陣がキラキラと魔を寄せ付けつけぬかのように瞬いていた

<続く>

違う

あれはお兄ちゃんじゃないそれでも俺と同じ匂いがした

そしてお兄ちゃんに似た彼は、消える直前

俺に何かを投げ渡した

手のひらに収まる程、ドングリ飴サイズの黒い宝玉

月明かりに照らされて暗い青色に光り、透き通った宝玉の中心には
亀に巻き付く蛇が銀色で描かれている

これは四神、北を司る【玄武】か？…

何故これを俺に……………

アンタは誰なんだ…？



突然の事だった

鋭い痛みとじくじくと流れ出す赤

左目の瞼を切ったらしい

切り口が深かったのか血が止まらず

傷口を押さえた指を伝い、滴り落ちる

顔の真横には小太刀が木に突き刺さっている

柄に桜と狐の紋が入り、刃には桜の花弁が彫り込まれている

間違いない、俺のだ

初任務の時じい様に渡された小太刀【舞い桜】

俺の相棒

成る程、この世界にももう一人の俺が居るわけか…

そしてそいつは敵だ

山に張った結界が破られる
結界を形成する媒体、今回は鈴にしたが敵に壊されたか…

相手は俺以上の手練れと見た
直ぐに神社の結界を強化しないと

そして、お兄ちゃんによく似たアイツが現れた

言いたいこと、やりたいことだけやって帰ったアイツが残したものは二つ
玄武の宝玉と結界魔方陣

俺達はその光景を呆然と見つめることしか出来なかった



兎に角、今は一安心って所か…

痛む左臉に河童の妙薬を塗り、余っていた手拭いできつく縛り止血する

怪我は直に治るからいいとして
依然目を覚まさないちょーちゃんとルーシーちゃんのオーラに乱れ

が生じている

何かあったか…？

「社、目……」

眉間に皺を寄せ、説明しろと言いたげなりク

分かってるよ

「小太刀が飛んで来たんだ

俺のと同じモノだから、この世界の俺は敵と判断した方が良さそうだ…

とにかくおにい…ウサ耳の人が張った結界魔法陣が有る限り此処は安全だと思うぜ」

キラキラと浅葱色の光を放つ魔法陣を見つめて言えば不服そうながらも頷いたリクにッホッと息を吐き出す
籠城戦となった今、一番の問題点は食料だ
ここに来て数時間、僕が居た世界では猿の刻で丁度日が沈みきった
辺りだった

そしてこちらの世界もまた月の位置から似たような時間である事が読み取れた

雲が空を黒く覆い尽くして月や星の位置は読み取れねえけど、僕の体感時間が正しければそろそろ夜明けだろう

そうなると、僕等は約半日何も食べていない事になる

緊張と混乱の所為で気にならなかったけど、このまま籠城する事になるなら最優先すべき問題点だ

今の季節は秋

陣内の木の種類を見る限り果物などは期待できないし、神社の供物に手をつけるなど言語道断だ

幸い、水は陣内の井戸で確保できるけど……

ちょーちゃんとルーシーちゃん、チョータローくんが何時起きるか
分かんねえのも問題だな

つーかアイツ等が今どうなってんのか全然分かんねえのも精神的に辛い

いつまで籠城すればいいのか分かんないし

一歩でも神社の敷地から出れば鬼の餌食だ

そうでなくても小太刀の持ち主が目を光らせている可能性が高い

めんどくさいなあ～

がしがしと自身の白銀の髪を掻き回し、苛立ちを押しえ込む

何事にも彼らが帰って来ない限り、下手に動くわけにはいかない
つーか動けないよね～

ま、枝を拾って焚き火で暖を取るくらいはできるかな

「リク、焚き火するから枝を拾ってくる！
皆の事少し見ててもらってもいい？」

スクールバックからカーディガンを取り出しているリクに一声掛けると一瞬迷うような表情をしたが、コクンと1回頷いた
それを見届けてから林に入る
陣内にある林は小さいけど仕えそうな乾燥した枝は十分拾えそうだ

拾おうと屈めば距離感が掴めずそのまま転んだ
ハズい……

片目だと全然距離感が掴めない
視界が平面に見えるし、俯瞰して見ることも出来ない、視野がスゲー狭い
なにこれ超不便！！

これは早急に治してもらわないとヤバイかも



ルーちゃんにカーディガンを掛け、近くの木の根元に腰掛ける
社が薪代わりの枝を拾ってる間の見張りと言うのは気が重い

僕に戦闘能力は無い
何かあれば社に頼むしかないのだ

僕にももう少し力があれば劣等感なんか感じなくてもいいんだろう
けど、残念な事に僕は感がいいだけの一般人だ
三人みたいに特殊な環境で育ったわけでも、取り分け目立った所のない人間
平凡が取り柄で自慢の僕が力を求めるなんて馬鹿な話だ
実にらしくない

思わず溜息が漏れる

それでも帰りたいと思わないのは不思議だ
物語なんかじゃこういう憂鬱な気分な登場人物は決まって【帰りたい】と考え、呟くのに
僕は一切そう思わない

それは曇天の空と僕等以外人気の無い神社、鬼、魔法陣、パラレルワールド
興味深いこれらに心引かれ、こんな状況をどこかで楽しんでる自分が居るからだろう

あー、僕も眠くなってきた
けどこの薄着で寝たら確実に風引くし、見張りあるし
社が帰って来るまでは起きておかないと

それにしても

「社、遅いな……………」

〔続く〕